
層の世界

天とぶ羽

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

層の世界

【Nコード】

N0152B

【作者名】

天とぶ羽

【あらすじ】

それは偶然か必然か―最下層街の闇に住む少年が光の少女と再会するとき、停滞していた運命が記憶と共に動き出す―初めてのファンタジー連載です。！注意！なるべく定期更新を目指しますが、不定期更新ですのであしからず…

プロローグ

世界は全て灰色だった。
灯りのない場所に居た。
出るなと言われていた。
だから、それに従った。

きっかけはほんの些細な事だった。
初めて何かが近くを通っただけだった。
何かが発するその音は高く澄んでいて。
聴いたことのないその音の主を、
見てみたかっただけだった。

―ただそれだけだったのに。

歯車が回りだす。どうしようもないほどの影響力と
止められないほどの方向性を持って
くるくる、くるくる、回りだす。
もう誰にも止められない
―回り続けたその後―

第一層 続きの始まり

0

―『層の国』建国記

序章より

旅をするもの、宝を求める。
求めたものは、未だ帰らず。
抱きし骨は旅を導く。
示す光は宝を目指し、
旅をするもの、いしを求める。

1

国一番の治安の悪さを誇る最下層街に朝が来た。面倒くさいけれど、起きることにする。

「いってえ…ここどこだ？」

何故か身体中が痛い…って、ああ…そういえば、昨日殴りあいのケンカしたんだっけ…

「こんなとこにいた」

と、陰に包まれた俺が顔をあげると、そこには俺が所属する盗賊ギルド長、知がつかさいた。

「あ、やべっ」

知は俺を見てため息を吐く。

「どうしてそう、他ンとこにちよっかい出す？おかげで朝から謝ってばかりだ」

「昨日は向こうからケンカ売って来たんだ、俺じゃない」

「殴りかかったのはお前が先みたいだけど？」

「先に触ったのはあっちだ！」

我ながらガキっぽい言い訳だなあ：

「…というか」

知はいったん言葉を切って、俺を睨んだ。

「戦闘ランク5位であるメンバーのケンカを買わない。名乗ったそ
うだな、相手は」

押し黙るしかなかった。それは本当だからだ。

「対することちは、戦闘力では常に中くらいだ。お前が勝てるわけ
ないことくらいわかるだろう」

知はそういうと、俺の後ろ襟を掴んで引きずっていく。全く、こ
いつの怪力ときたら：

「ぼろぼろこぼれてるぞ、思ってることが」

更に強い力で引かれ、首が絞まる。

「ご、ごめんなさ：歩くから離してくれッ」

かなり真剣に頼んだけれど、知はしらん顔だった。

―あ、世界が白く：

次に見たものは、俺の部屋の天井だった。木で出来た、暖かい感
じのもの。次に、慌てた顔の知が俺を覗き込んでくる。

「ご：ごめん、強く絞めすぎた」

確信犯かこいつ。

「別にいいよ、いつもの事だし」

知のある種の暴力？は今に始まったことじゃない。知がギルドの
長になる前から、俺に対してだけはいつもこうだ。

「う…」

つと、あんまりいじめ過ぎるとまた泣き出すかな？

「冗談、俺は強いから大丈夫だ」

俺と2人有的时候きは、長ではない知がいる。出会った頃から変
わらない知が、そこにいる。だからちよつとからかうとすぐ泣くし、

すぐ怒るし、すぐ笑ってすぐ優しい表情で俺を抱きしめる。

名残惜しいけれど、時刻を確認、知に告げることにした。

本当はもう少し、この知と一緒に居たかったけど…

「もうすぐ『戒』^{いまいしめ}の時間だろ？ 行かなくていいのかよ、お頭サン？」

スイッチを、入れる。

スイッチが、入った。

「煩い承知している。あとお頭と言うな、したっぱのクセに」

にいつと笑って、部屋を出ていった。扉が閉まる直前、小さく

「ありがとう」

という声が聞こえた。

今日も1日、楽しい日になりそうだ。

「…その前に、手当てしてもらおう…」

ヤセ我慢は体によくないからな…

2

午後、俺はいつも通り市場をふらふら歩いては、果物を掏って食べていた。そんなことがばれたら、また長に何を言われるかわかったものではないけれど、やめられない止まらないという奴だ。

俺の所属する盗賊ギルドには名前がない。というのも、名前があったところで意味がないからだ。その名を口にするものは誰も居ない。居たとしても、すぐに居なくなる。

ギルドが恐れられる理由。それは、この国のギルドランキングというシステムにある。ランキングは毎月更新され、仕事の出来や信頼度を数値化し、今までのものにプラスしていく。新たに出来上がったギルドには創設時に100ポイントが与えられ、仕事に応じて加算されていく。勿論、減算されることもあるわけで、0ポイント

になってしまった場合には、即刻解散が言い渡される。ポイントが高いギルドから順に報酬の多い仕事を多く受ける事ができる。

兎に角そんなランキングにも種類がある。職業で分けられたランキングで、戦士・騎士・魔術・盗賊・商人がある。ギルドと名乗るためにはそれなりの条件があるため、他にも様々な職業に従事している人たちもたくさん居る。

と、教え込まれたことを復習していると、なにやら人だかりが出来ていた。

「あ、心さん！」

「ああ、バンダナと包帯のキミか。私はホラ、担当じゃないから良くわからないけれど、キミなら判るだろう？」

心さん―俺の所属ギルド（仮に無名とでもしておこう）の探索&治療係。変な能力を持つているとの噂が立っている。いつも黒のポロシャツにジーパン、その上から白衣というよくわからないセンスの人だ。

「…たしかにバンダナも包帯もつけてますけど」

その呼び方はどうかと…

「見てくるといい。判るだろ、キミなら」

さて、どういう意味だろう。

俺は人ごみを掻き分けて円の中心まで行く。

「あいつ…」

円の中心には、私服のときにそれと判るように、騎士ギルドの腕章をした男達が検証をしていた。テープが張られ、奥にいけないようになっている。

そして、その中央。

昨日、俺とケンカをした戦士ギルドランキング五位に位置する『くれない』の幹部メンバーが倒れていた。仰向けで、自らの自慢の得物が、心臓の位置に突き立っている。深くまで突き刺されたそれによって、彼は土に磔にされていた。他に外傷はなさそうだ。血は

流れていない。―何かが、おかしい。

俺は人混みを出ると、心さんのところへと向かった。

「如何だった？」

「内部抗争かもしれないし、暗殺かもしれない」

「その問題点は？」

「内部抗争だとしたら、殺し方がおかしい。くれないは寧猛で残忍なのが特徴だったはずだから、流れ出る血の量が圧倒的に足りなさ過ぎる。でも、暗殺だとしたら、こんなところで殺すのはセオリーに反している」

うむうむと納得したように頷いて、糸のように細い眼をゆっくりと開いた。

「私の眼を、直視しちゃ駄目だよ？」

俺は言われたとおりにした。多分、それは本当だから。

「どうです？」

「見えた視えた。多分、あいつだろう。厄介だから、早く帰って知に言わなけりゃ」

「同感です」

歯車は静かにその時を待っていた。

第一層 続きの始まり（後書き）

間違えて途中のものを投稿してしまうという最悪の失態をしてしまい、申し訳ないです…。

この話は、暇つぶしのためにカタカタとやっていた話なので、まともや適当っぽい感じではありますが、投稿にあたり手直しをしています。どこで区切ろうかな〜とか、ここ変えちゃえ！とか、そんな感じに…。

大分前の作品なので、かみ合っていなかったり伏線張ったにもかかわらず回収も触れもせずに放置していたりと散々なものでした…。なので、手直ししてからのも更新になります。滅茶苦茶遅くなるとは思いますが、読んでいただけると嬉しいです。

次の更新日は、やっぱり未定です；

第二層 崩壊の足音

0

―『層の国』建国記

第一章より抜粋

明^{あか}をつかさどるもの
導かれし流れに囚われ
冥^{くら}をつかさどるもの
囚われし流れに導かれ

1

夢を見ていた。
暗い場所に居る夢。
明るい場所を知らない夢。
夢だと、認識できるような夢。
夢ではないと、言い聞かせる夢。
事実だと、刷り込むための夢。
白い女が、男に付き添う。
黒い男は、女に従う。
夢を、見ていた。

―誰にも言わないこと。
―それが、条件です。

―どうやって眠りにつくか、ですって？

―数を数えてみてはどうでしょうか。

―星を数えることが出来るようになれば上出来ですよ。

―いくつまで数えられるか、やってみるといいですね。

いつか言われた言葉。

暗い部屋の冷たい扉を開けてくれた最初の人。

初めて光を浴びたときの、第一声。

やっぱり冷たかったけれど、とても暖かった。

今どうしているだろうかなんて考えない。

考えても意味がないからだ。

意味がないことはしないほうがいい。

そのうち意味が出来る。

そのうち知ることになる。

焦る必要はない。

誰に教わることなく悟ったことの一つ。

2

ギルドに戻ると、知^{つかさ}が仁王立ちして待っていた。

「な、なんだよ」

「なんだよ、じゃない。何で早く戻ってこないんだ」

かなり、ご機嫌ナナメみたいだ。心^{しん}さんはいつものように目を細

め、いつものようににっこり笑っている。

助ける気、ゼロだな…

ふと見ると、知は拳を固めていた。

「こっちがどれだけ心配したとおもってんだこのばか!!」

「ちょ、ちょっとまっぐあっ!」

周りの男どもは豪快に笑っている。くそ、何だって俺がいつもこ

んな目に：知ももう少し女っぽくなれば、実はかわいいのになあ：「失礼なこと考えてるだろ？」

「ち、違うつ！………知はかわいいなあって」

「………っていうか問答無用！」

「ぎゃあああああ！！！」

ほんのり紅くなっている頬を隠すためだろう。知は近くにあったものを俺に何かを投げつけた。

「ま、待った、刃物は危ないっ！！」

知は自らの得物、短剣を投げつける。

「一度戦闘不能になってみる？」

「この状態を見ろ、俺は確実に死ぬ！！」

壁には次々と短剣が刺さっていく。

「ちょこまかと！！」

「殺す気かあ！！」

男たちはいつものように笑っているだけ。俺も知も、その顔には笑顔があった。

「いい加減止めろ、けが人が出るぞ？」

「コントロールはしているつもりだ！」

そのコントロールのおかげで、顔に分厚い本を受けた心さんが苦笑している。

「若いつてのは、いいこったなあ……」

そんなフケたセリフで俺達は笑い転げてしまった。2人とも、もう追いかけてこなくてしてられないほどに大爆笑だった。

本当に、こんな日が続けばいいと思った。

叶わぬ夢だと知りながら、それでも。

「…え？」

身体が動かなくなった。思考すら出来ないほどの衝撃を持ったその言葉は、それでも事実としてのしかかっていた。

「な、なに…言ってるんだ、お前」

目の前の少女は、ただ鋭い瞳を俺に向けているだけだ。その奥に悲しみがある。

「お前を国に…騎士ギルドに引き渡す」

もう一度、はっきりと告げられる言葉。

周りの男たちは笑いもせず、じっと俺達を見ていた。

今日目が覚めて始めに見たものは、騎士ギルドに囲まれる知だった。知は相変わらず厳しい表情で何かを話していたが、やがて騎士たちは「必ずだ」と言って帰っていった。そして目が合った俺に何も言わず、俺だけを除いて話し合いをしていた。比較的新参者である俺が無理やり参加できるわけもなく、外で仕事をしてくることにした。

嫌な予感は確かに芽吹いた。

夕方、俺が戻ってくると男たちは俺と知を囲んだ。それがいつもの風景だというのに、今日はなぜか嫌な予感がやまなかった。

そして、放たれた一言。

「お前には『くれない』メンバー殺しの犯人として騎士ギルドに行ってもらおう」

寒気がした。

周りの男たちの目はいつもとは違って、仕事のと時のみ見られるそれだった。

「反論はしないほうが懸命だ、黙って知に従え。」

暗にそういわれている気がして、目を合わせられなかった。心さ
んでさえ、厳しい顔つきでいた。

「…な、んで…」

静寂が満ちたアジトの中は、どんな小さな音でも大きな音に聞こ
えてしまう。

この高まる動力の音も、聞こえてしまっているだろうか。

「……わかった。行く」

反論できない。

それが、このギルドを保つための…救うための最善で最短の手段
だからだ。

知にもそれがわかっていたからこそ俺を選んだのだろう。

このギルドにも他のギルドの例に漏れず、実行隊のほかに女や子
どもが待つ居住区がある。実行隊にも女はいるが、居住区の安全は
騎士ギルドから管理を任されているためほぼそちらに割かれている。
騎士ギルドは居住区の安全に一切関わることはない。もし関わるこ
とがあるとすれば、それは居住区を潰すときだけだ。

「知は朝、脅されたんだ。」

俺の推測だけれど、『くれない』の連中が犯人は俺だと言い張る。
けれど、騎士ギルドとしては証拠がないから連行は不可能だ。ただ
でさえ戦士ギルドと盗賊ギルドは中が悪い。けれどどちらも国にと
っては重要だ。衝突は避けたい。

そこで妥協案…というよりは強制的に終わらせる手段。

俺が自首したという形にして、『くれない』を納得させる。衝突
はしないと約束させる。

そもそも純粋な戦力では、盗賊ギルドは戦士ギルドには叶わない。
けれど、周りを巻き込むようなことを平気とする盗賊ギルドとの衝
突は、国の根幹システムを揺るがすことになりかねない。それを踏まえての、

騎士ギルドの判断だろう。

「じゃあ、短い間でしたけれど、お世話になりました」

その場で軽くお辞儀をして、玄関に向かう。知は何か言いたそうだったけれど、言葉にならないようだった。

「自分の判断だ、泣くなよ、知」

俺はそう言い残すと、騎士ギルドへと向かう。

逃げるようなことはしない。どうせ見張られてる。

堂々と騎士ギルドの入り口に立ち、門番である2人の内1人に声をかける。

「盗賊ギルド所属、ナンバー1000154です。自首しに来ました」

「入れ」

その場で拘束され、俺は両腕を掴まれながら歩いていく。

なぜか、笑いがこみ上げてくる。

嬉しくもないのに笑いがこみ上げてくる。

—こんなの、いつものことじゃないか…

第二層 崩壊の足音（後書き）

すみません、かなり放置してしまいました…

ようやく投稿です。

もう少し早く更新できるように心がけますので、温かい目で見てください…

第三層 騎士ギルド

0

光に向かうは幻か
闇に向かうは現^{うつ}か
開かれしは影の扉
いしを求めし旅人の
待ち人は未だ来ぬ光

1

「…は、あ…」

騎士ギルドに自首したのはいいが…もてなされるとは思わなかった。

待っていると言われて待たされている部屋は、豪華な…第一階層街くらい豪華な部屋。赤いフカフカの絨毯が床一面に敷かれ、綺麗に磨かれた棚やら壁やら柱。高そうな置物。

どう考えたって、俺が一番汚くて場違い。

「待たせてすまなかったね。私がこの騎士ギルド最下層街支部長のフェリスだ」

騎士ギルドの中で位を表すためには、鎧の独創性と手甲に掘られる紋章が用いられている。

が…こいつは普通だな…特に目立った変化は見られない。

「君が自首してくれた子どもかい？」

「…あの。犯罪者にこういうのってよくないんじゃないですか？」

一応敬語で話してみた。が、驚いた表情のあと大爆笑を始める。
「驚いた、最下層街にも礼儀を知ってる人がいたとは…先輩も嘘ば

かりおっしゃる人だからな」

わけがわからない：けど、バカにされた気がした。

「なんなんだよアンタ、どうにかしたいならさっさとしろ」

「いや、すまない。気分を悪くしたのなら謝るよ」

ため息を吐いた後、ふかふかの椅子―ソファなのだが―に座る。

俺は立ったまま、促されても座らない。

「：こちらには君をどうしようという気はない。君は国に貢献した、いわば尊い犠牲なのだからね」

「：はあ」

何が言いたいんだ？この支部長は。

「君には第一階層街にある研究所ラボに所属してもらうことになる」

：はい？今、なんとおっしゃった？

「そこで、この国を維持するためのエネルギーについて研究するんだ」

研究？：研究って：勉強しないと出来ないんだろ？何言ってるんだこのバカ。

「ここまでで質問は？」

「質問したいことしかないけど：とりあえず、なんで俺なんだ？」

「君でなければいけないんだ。それだけだ」

それは理由になっていない。それくらいはわかる。

なんなんだ、こいつ？

ちらりと見えた手甲には、騎士ギルドの紋章が半分以上出来上がっていた。

それはつまり騎士団長以上を示す。こんなに若く見えるのに、実は年増？

「失礼なことを考えていないか？」

「年増だろ、お前」

「失礼だな、君は。僕はこう見えてまだ25だ」

「嘘吐け」

「嘘吐いてどうする」

いや、そんなのわからないけど。

俺は正確な年齢さえわからないから、少しうらやましい。

「とにかくだ。君にはこれからそれなりの格好をして、研究所へ私と共に向かう手はずになっている」

「いきなりそんなーっわ!？」

ばたんと扉が開いたかと思うと、騎士ギルドに勤める事務係…いわゆる侍女のようなやつらが入ってきて俺を拘束した上で引きずっていく。

「ちよつと、まで…は、な、せつ!」

「じゃ、ヨロシク。準備が終わったらまたここへ来るんだ。…リオ、あとは頼んだよ」

統括する立場らしい女の人とその部屋を出ると、扉は閉まる。俺は引きずられるまま、まずは風呂場へと放り込まれた。

「ちよつと、まで、おい、脱ぐのは俺が自分で——!!」

「…それだけは外すな!!」

「じっ自分で出来るから——!!?」

「いだいだいだいだいだい!!」

「あつっ!?! 熱いってば!!」

「これ…着るの?」

すっかり汚れを落とされて髪すら整えられた俺は、落ち着かない気分のまま洋服を着せられていた。

でも…長い間最下層街にいたからだろう、その雰囲気や臭いは取れない。

「これは第一階層街における入隊直後の『騎士見習い』に与えられる普段着です。第一・第二・第三階層街男子には、法により一定期

間の騎士ギルドへの入隊が義務付けられています。そのため、外見年齢上、この普段着を着ておけばよいでしょう」

さつきリオと呼ばれた人が目の前に立った。ブーツにだぼったいズボンをいれ、二の腕の途中まで袖のあるわりとゆったりとしたシヤツ。腰で一度絞っても尻を完全に隠してしまうほど大きいから、サイズ間違いなのではと思う。

そして、鞆に入れられた訓練用の剣とそれを腰に下げるためのベルトを装備して常に行動するのが通常らしい。

：短剣やらなにやらを隠しておけないのが落ち着かない。隠し持っていた全ての武器はどさくさにまぎれて回収された。

「さあ、支部長の下へ戻りましょう」

周りを侍女たちに囲まれて歩くのは、なんとも落ち着かない。

これから何が待っているのか、見当もつかないけれど：俺にはわかる。

もう、最下層街には戻って来れないだろう事だけは。

「やあ、綺麗になったじゃないか。こう見ると：君は結構幼い顔立ちをしているんだな」

「悪かったな、ガキっぽくて」

失礼なやつだ。

「きつと君は惚れられやすいだろうな」

「：どういう意味だ、こら」

「深い意味はないよ」

ニヤツと不気味に笑い、歩み寄ってくる。

「それにしても、その格好が似合うな。上の階層街で10才くらいの男子が着る服なんだぞ、それ」

最下層街でだって、そのくらいのやつらが着ているようなデザインだよ。

というか：さらっと嫌味言われた？

「さて、そろそろ迎えの馬が到着する頃だ。：君は馬に乗れるかい

？」

「当たり前だ。俺を誰だと思ってやがる」

「自首してきた盗賊」

「…間違っでは、いないけど。」

「そうそう、君は今までの名前を捨てるんだ。いろいろとまずいことになるんでね。君はこれからコウ・フェリスという名を使え」

「コウ：フェリスって…」

「君は今日から僕の息子だ」

息子。

そんな、勝手に。

「戸籍上ではね。君にも家族と思える人がいるのだから、戸籍上だけだ」

そんな勝手に決められるような家族なんて。

『かぞくなんていない』

どうしてこうも次々と、面倒を運び込むんだ。

「さあ、コウ。行こうか」

「ああ」

俺を一体どうしようって言うんだ、君は。

第三層 騎士ギルド（後書き）

お待たせいたしました。

ご意見・ご感想などありましたら連絡お願いします。

第四層 上へ

0

天と地の交じり合う土地
旅人は地を選び
待ち人は点を選び
交わることもない線が続く
再び交わる時が始まり
点と千の交じり合う土地

1

馬は乗れるかと聞いたのは、実は意味がないことだと気付いた。
「つうか馬車だし」
少し考えればわかることだ。最下層街に広く名の知れた『名無しの盗賊ギルド』の長と一番仲がいい俺が知らないわけはなく、もちろん顔なじみが多いこの街。そんな中を綺麗にしただけの俺が歩いたら、たちまちばれてしまうのは目に見えている。

「馬に乗りたかった？」

「別に」

最下層街から第三階層街までをつなぐ『^{アーチ}天空橋』の前まで馬車で移動する。騎士ギルドの紋章が車体の側面に描かれ、馬車の横には馬に騎乗した騎士の何人かが護衛についている。

「さて。少し待っていてくれ」

ジル：ジル・フェリスは、馬車を降りると天空橋前にある検問所

へ行き、手甲の紋章を見せて戻ってきた。

「さあ、こっちだ。馬車は降りていい。君も知っていると思うが、このあたり一帯は最下層街の人間は近づけないようになっていないからね」

俺はその指示通りに降りる。今まで見たことの無い場所に興味はあった。けれど、二度と来ないことが確定したこの街を、もう一度だけ見ておきたかった。

「特に思い入れもないけど」

そう、思い入れはない。気がついたらここに居たというだけで、そして拾われたから住んでいただけ。たったそれだけだけれど……やっぱり、気になることがひとつだけある。

「さあ、行くよ。あまりぐずぐずしてもいられないからね」

ジルが先を促し、俺はついていく。やっぱり抵抗すればよかったとか、今なら逃げ出せるとか、そんなことも考えたが……結局はもう『如何でもいいこと』だ。

天空橋はその周りを固められ、検問所から離れること10キロ圏内は立ち入り禁止となっている。平原が続いているから検問所から見れば侵入者は一目瞭然で、騎士ギルドの管理下であるその場所に踏み入るものがいれば即殺される……らしい。

らしい、というのはそれを聞いたのが今であり、情報源がジルで信用に掛けるからだ。

「さっぱり信用ないみたいだね」

「当たり前だ。俺はあんたみたいな胡散臭いやつは信用しないことに決めてるんだ。そう教えられた」

「彼女……ギルド長に、かい？」

「……まあな」

いちいちそんなこと言わせるなど言いたい。わかってるくせに……ひよろっこい上に頭の回転が早いやつは苦手だ。

「もういいかい？」

：『二度と戻って来れない』ではなく『二度と戻って来ない』。

『この景色』じゃない景色を覚えておこう。

「じゃあな、つかさ」

俺はゆっくりと歩みを再開する。俄に騒がしくなる検問所の最奥『登りの間・フロウゲート』に差し掛かった、その時。

フツと明かりが消えた。フロウ・ゲートは常に柔らかな光を放っていて、その光があるからこそ迷いなく昇ることが出来ていた。それがなくなるということは『昇れない』と言うことだ。

というか、どうやったら光が消えるのかすら分からない俺は事の重大さに気がつくわけもなく。

「：離れないように」

ジルはそう言っただけの手首を掴む。：が、俺はそれを振り払う。

「大丈夫。ガキじゃないんだ、俺だって」

「僕には君を無事に送り届けなければならぬのでね。これからの生活のためにも、仲間に君を奪われるのは防がなくてはならない」
仕事のためか、それとも自分のためか。

俺のためじゃないことだけは確かだ。これから仮の家族として移住を共にする俺に少しでも心を開いてもらおうとしているのかもしれない。

：余計なお世話だ。

2

「復旧を急げ。時刻までに上れなければ、明日もここにいることになるぞ！」

ジルが命令を下し、検問所の警備兵は俺達の周りを固めている。

検問所では何人かの技術屋がなにやらうようよしていて…復旧をしているのだろう。

…と、突然警備兵の1人ががうめいて倒れた。

ジルの手を離れ、すぐ近くに倒れていた兵を見る。

―死んではない。ただ…マヒしてるな…神経毒？

…まさか…!!

「くっ…」

咄嗟にジルの前に走り、腰から下げていた剣を抜き、攻撃を受ける。とはいえ訓練用の剣というほどだから、気持ち程度でしか…

「なっ!？」

訓練用の剣というから、木で出来ているのかと思っていたら…違った。

「光ってる？」

剣の中央、少し窪んだ黒い部分に文字のようなものが浮かんでいる。その光で相手の顔が良く見える。

「…心、さん」

目を閉じた、見知った顔があった。

周りの戦闘もさることながら…

死角からの斬撃。振りかえる時間も惜しくしゃがむ。

「知の、差し金か？」

ジルに向いている攻撃をすべて防ぎ、ひたすら弾く。

…分かってる。いつまでも保つわけがない。

「…違いますよ。彼女は…長は関係ない。私が指示を出しています」

「なんでっ…!! 俺の…っ無駄だろ…!!」

弾く、避ける。短剣に対して、こちらは普通の剣。スピードが違う。

「…ジル、離れろ! 戦い難い!」

そう叫んだ瞬間、腹部に激痛が走った。

「悪く、思わないでくださいね? 君に戻られては困るのですよ…」

そう言った、声が聞こえた。

「いいのですか？ 勝手なことをして」

「許されるさ、連れ戻せばいいんだろう？」

男は大きなあくびをする。

「それにこれくらいは必要だろう。閉じた世界の扉を開く鍵を渡したまでだ」

「知りませんよ、怒られても」

平坦な声に返す男はにやりと笑った。

「…怒られないさ」

第五層 第三階層街

0

昇ったそこはどこだったか

旅人は求める

滞在の後、のち

旅人は得る

1つ目の鍵を

1

激痛が走る。体は簡単に動くが、ダメージは大きかったみたいだ。

「つてえ…なんだよ、もう…」

目を覚ました場所は汚い小部屋じゃなく、綺麗な部屋だった。

「あ…おはよう、コウ。調子はどうかな？」

「…最悪だ」

ここは第三階層街の騎士ギルド支部。フロウ・ゲートの最奥にあったのだという第一階層街までの快速ゲートが閉ざされ破壊されたため、仕方なく一層一層昇ることになった。

そして俺達は、数週間の間ここに滞在するのだという。

「そう？ 具合、悪いの？」

具合悪いって言うか…心臓に悪い。

目の前にいるのはトモリという女。この第三階層街騎士ギルドに勤める見習い事務官で、ジル直々に俺の世話を任されたらしい。年の頃は…16くらいだろうか。

こいつ、髪と目の色は違うが：雰囲気を知にそっくりだ。目が覚めたとき、一番初めにこの顔が現れたときは思わず叫んでしまったほどだ。

「いや、大丈夫。それより、仕事はどうしたんだよ？ 毎日ずっとここにいろけど」

俺が心さんに短剣でわき腹を刺されて運ばれてから、ずっと看病・治療をしてきている：らしい。

らしい、というのは、俺が3日間ほど眠っていたからだ。心さんの使うナイフには、この国で取れるありとあらゆる薬草から調合された神経毒やら薬が塗られている。傷口から入れば、なぜか人によって違った症状が出る。そして、その効力や持続性も異なっている。俺にとっては、強力な睡眠薬となったわけだ。

「これが私の今の仕事だから。でも、驚いたよ。フェリス様が直々に私をご指名なさったの」

「ふうん」

「興味ないみたいだね？」

「一度聞いたからな」

ゆつくりとベッドから降りる。トモリは驚いていたが、止めるようなことはしなかった。

両脚で体重を支えるときすぐに激痛が走るけれど：立てないほどではない。

「：私、第三階層街の中心部にある道場で小さいときから看護師してただけぞ」

トモリがいきなり話し出す。何かと思えば経験話らしい。

「こんなに早く立てるようになった人なんて始めて見たよ」

俺は特別製だからな。

ゆつくりと歩くと、さすがに我慢できないほどの痛みを感じる。

「ああ、ほら、傷口開くよ！」

強制的にベッドに戻らされる。傷口を消毒し、包帯を巻きなおした後でトモリは部屋を出て行った。今度来るときは夕食を持ってく

るだろう。

：ん？ 俺、今なんて思った？

考えるとあの襲撃は不自然だった。

まず心さん。一番不自然で、一番怪しい。

あの人は優しそうな顔で表情を変えずに人を殺すくらいなんともない人だ。知でさえ一番信用していなかった人。葉草や毒草など植物のことについて熟知していて、あの人ならどんな相手にどんな効果を及ぼすかぐらい分かっていたはずだ。それと、フロウ・ゲートを片方だけ壊すなんて中途半端な仕事は絶対にしないはず。となれば：目的は俺じゃない？

いくら心さんでも知の命令がなければあれほどの人数を動かせるはずがー

：って、そういえば心さんと一緒に来たのだろう雑魚たち：あれは、知のギルドの人間だったか？

それに、俺が倒れた後事態を収拾させたのは誰だ？

目標が達成させられたのか：それとも、中断せざるを得ない状況に置かれたのか：

分からないことだらけだ。

「調子はどうだ？」

ジルが見舞いに来たのは、夕方のことだった。

窓から見える夕陽の高さが違うことでここが最下層街とは違うと実感させられる。

「大丈夫だ」

「そうはみえないけどな。とりあえずゆっくり休むんだ」

ジルはわざわざ窓を閉め灯りをとめた。

ベッドの横にある椅子に腰掛けてにっこりと笑ったジルの顔を見る。

「なあ、質問してもいいか」

「答えられることのみ答えよう」

「あの事態をどうやって収拾したんだ？」

ジルはきょんとした後、いきなり笑い出した。

「な、なんだよ？」

「いや、甘く見てもらっちゃ困るな。これでも相当な位にいるんだ」
そういえば、そこの貧弱ものよりは高い地位にいるんだった。
だけど…心さんを防げたとは思えない。

「なに？ ああ、あの人のこと？」

「まあ」

何かを考えるようにして、口を開く。

「簡単に言えば、僕が退けたよ。コウが頑張ってくれたおかげで隙も見つけられた」

「隙！？ 心さんに隙があるのか！？」

「そりゃある。呼吸のタイミングだとか、攻撃後とか」

心さんの攻撃の速さは生半可じゃない。それを、隙というこいつは一体：

「とにかく早く直すことだよ。明日からは第三階層街騎士ギルド本部に寄宿するからな」

…攻撃を受けてから一週間で？

普通なら数週間ずっとここにいろだろう。

「コウはそんなにやわじゃないだろ？」

…そう。ほとんど、傷は治っている。外側は酷く見えるけれど内側はほとんど治っている。

でも、見ただけじゃ分からないはずだ。トモリでさえ気づいていない。

なんで…？

第三階層街騎士ギルド本部は、第三階層街の中心に位置している。広い土地の中にフロウ・ゲートを有していて、騎士ギルドの認可を受けなければ上の階層街に行けない仕組みだ。

俺は、騎士ギルド本部の騎士待機所にぽつんと座らされている。共に来たジルは第三階層街騎士ギルド長と話があるらしく、俺を置いてギルド長の元へと行ってしまった。すでにここで2時間ほど待たされている。

「はやくしろよなあ…」
暇だ。

もともと、じっとしていることが苦手で知に散々怒られたにもかかわらず動き回っていた俺だ。2時間座っているだけで褒めてもらいたいくらいだ。

俺がいる待機所には、テーブルと椅子がずらつと並んでいる。この待機所は長時間いるときに使うんだろう。食い物や飲み物が散乱している。最下層街や第三階層街の一般的な店やら民家やらに比べれば随分綺麗なほうではあるが、それでも汚れは目立っている。ジルに聞いたところによれば、このギルド本部には騎士達の寄宿舎なるものがあるのだそうだ。親元離れてギルド本部に勤めているということらしい。待機所は休憩室代わりであり人が来ないから、安全だそうだ。他にも、各第三階層街騎士ギルド支部にはそれぞれ寄宿舎が付いているとか。

最下層街では騎士ギルドでさえそんなものはなかったはずだ。ギルドはギルドで固まって生活をしていた。そのギルドに生まれたものはそのギルドで生活をする、それが当たり前だった。そして、生きる道でもあった。

一やっぱり、違うんだな。

今更ながらに、そんなことを考える。

「…あれ、ギルド見学？」

知らない声だ。振り返ると夕陽色の髪を後ろで束ね、同じく夕陽

色の瞳を興味深そうに向けている女がいた。

「いや、女なのかな？」

随分と中性的な顔立ちで、しかも軽装ではあるが甲冑を身に着けているから判断が付かない。

「つて、わけでもなさそうだねえ？ 案内役いないし」

ずかずかと一職場なら当たり前だけれど一歩き、わざわざ俺の目の前に座る。

「…でも、騎士見習いの服着てるし。…マジックソード施術剣を持ってるって事は、上位ランカー？」

一わけの分からない単語だらけだ。

「でも、見たことない顔…それに、珍しい髪と瞳だね？」

それはそうだろう一つて

「え？」

「ん？」

にや、とその人は笑う。

俺が驚いたのは髪の色のことだ。俺はここにくる前…最下層街を出る前、更にこんな服に着替える前に、髪の色を染めさせられていたからだ。

どうやって色を変えたのかは覚えていないけれど、確かに焦げ茶色にしたはずだ。所々黒が混じってはいるが、その程度は『濃い』で誤魔化せるだろうとお許しを貰った一はずなのに。

「黒に黒、か…ふむ、なるなる」

なんなんだ、こいつ？

そいつはあたりを見回し、誰もいないことを確認してから首にかけていたのだろう物を引っ張り出す。

「これに、見覚えある？」

—それは唐突だった。

透き通った、燃えるように真っ赤な揺らめきが、角を落とした正方形の枠の中にある。

掌におさまる小さなペンダントだったが、それを出した途端目の前の人の瞳が紅蓮に染まる。燃えるような。

「う…」

ずき、と痛みを感じた。額を抑えることでなんとか耐えようとする。

刻まれた、それはなんだったか。

「うんうん、あたりだね」

予想していたかのような声で、その人—

「はじめまして。ボクはリカリア・ホーランド。キミの名前は—
—だよね」

リカリアは、満面の笑みでそんなことを言ったのだった。

小休止 知という女の子

0

歴史に沈みましょう。

もう役目は終わったのだから。

1

動けなかった。

追いかけて「嘘だよ、びっくりした？」と笑って言えたらどれだけよかっただろう。

でも、それも叶わないんだ。

傷ついた顔をしていたと思う。無表情だったけど、多分そうだ。私と自分の立場、言われたことの意味、多分全部を悟ったからこそどうして、と聞いてこなかったんだと思う。

私は：ひどいことをした。でも、それが盗賊ギルドの長たる私の役目。

逃げられなかったんだ。

「大丈夫かい？」

「：うん、平気。今日は：暫く放っておいて」

彼が行ってしまった後へたり込んで呆然としていた私に、誰かが声を掛けてくれた。

体に力が入っていないことがわかる。懸命に重い体を引きずって、

広間を出る。

「今日一日で、リセットしてみせるから：明日まで待ってて」

お父さん、こんな情けない私が長でいいのですか？

ギルドは家族のようなもので、そのメンバーが1人欠けただけでふらつくような私が長で、本当にいいのですか？

心さんのほうが、おジィちゃんのほうが合っているのではないですか？

お父さん、わからなくなりました。

本当に、私に長など務まるのでしょうか…？

真っ暗にした部屋から、窓の外を仰ぐ。空は晴れ渡っていて、この気持ちを包んでくれているような気がした。

自然と涙がこぼれる。

―ああ、そうだ。

―私の泣く場所は、もうないんだ。

―受け止めてくれる人はもういないんだ。

やっとここまで仲良くなって、心も開いてくれていたのに。

望んでも望まなくても関係なく、平等にやってくる別れ。

お父さんだってお母さんだって、お姉ちゃんだって弟だっていなくなっただけ。

彼の時だって、初めからいなくなること覚悟しておいたじゃない。

なぜ忘れていたんだろう。

この感情は捨てよう。そして、覚えていよう。

お父さんとおかあさんとお姉ちゃんと弟のように、記憶に残して。記憶に対する感情は、あってもなくても同じだから。

「うん、そうしよう」

明日になれば笑えるように。

「…じゃあね」

テーブルの上においてあった、今日は外したペンダント。
彼からの、最初で最後のプレゼント。
それを、窓の外に。

2

「それでいいのですか」

どこかで白い少女が呟いた。

少女の目の前の青年はテーブルに分厚い本を開き、何かを書き記している。

「どうにか出来ることではない」

青年はため息をついて、椅子の背に体を預けた。

「私は存在しないモノだ。記すことしかできない」

「それはそうですが」

いつも以上に反論してくる少女の頭に大きな手を乗せる。

「あの少女がそんなに気になるのか？」

「いえ」

「即答は肯定とみなすぞ？」

「私は否定しましたが」

「…そうか。ようやく1つが終わったな」

「はい」

「そのうちお前も登場するだろう」

大きな手から逃れて、少女は白い世界から遠ざかる。

「待ちに待った瞬間だろう？ 喜べよ…こう、両手を挙げて」

「……………」

振り返って、すたすたと青年の正面まで歩き、立ち止まる。
そして少女は下から青年の顔を見上げる。

「降参の合図だと認識します」

「…いや、冗談だ」

少女は再び扉に向かい、青年はため息を吐く。

少女が扉の向こうに行ってしまうと、青年の独白が始まる。

「早く本物の動力を入れてやらねば…時期に均衡が保てなくなるな」

「こちらが一足遅いのか」

青年の独白は続く。

「…この者達には申し訳ないが、消えてもらうか」

― 閑話休題 ―

第六層 ひとつの記憶

0

旅人は鍵を見つけるために
鍵を探す。

導かれし者、石を求める。
空に昇る石を求める。

1

ジルに連れられてギルド長―ギルドを納める長で、大抵は騎士団
長と掛け持ちされる位―の前に立った。

何故俺が？ と訊く余裕はなく連れられるままに立ったはいけ
れど、二人は俺を無視した話を続けていた。完全に蚊帳の外だ。
なんで、ここに連れてこられたのだろう。

けれど訊くために話をさえぎるのも、なんとなく憚^{はば}られた。だか
ら、また座っている。

今度は木製の椅子ではなく、そふあと呼ばれるフカフカな椅子。
ちょっと跳ねると浮遊感があって少し楽しい。

「コウ、大人しくしている」

「まあまあ、退屈なんだろう彼も」

「それにしても、このくらい我慢できないと」

「本当にすっかり親だな、お前は」

どうやら知り合いらしい二人。俺には関係ないけれど。
それよりも…

「コウ。そういえばさつき待機所に居た騎士とは知り合いか？」

「んなわけないだろ。俺はフロウ・ゲートのことも知らずに最下層で暮らしてたんだからな」

「なら、なんであんなに親しそうに話してた？」

「そんなこと、こっちが訊きたい。」

「待機所にいた騎士ってどんなやつだ？」

「なんと、食いついてきた。」

「オレンジの髪をした……」

「ああ、ホーランドか。あいつはだれかれ構わず親しくするからな……引きずられたんだろう。そんな性格していそうな顔だし」

「どんな顔だ。というか、流されやすくて悪かったな。」

「そうなのか？」

「まあな」

「食いつくところが違う気がするの俺だけなのか？ そんなこと、

気にする必要ないのに。」

「もしくは、俺に関係あるのか。」

「いいこと考えたぞ！」

「……カイズ。お前のいいことは悪いことなだけだな」

「失礼な。今回はいい考えだよ。ホーランドに、第三階層街を案内させればいい」

「……迷惑な考えだな……」

「ジルは俺をじっと見つめた。俺がにらみ返すと、ふうとため息をついて了承した。」

「そうだな。珍しく懐いたみたいだし……だが、強いのか？」

「俺の右腕だ。ああ見えて、その辺のチンピラや騎士でも勝てるかどうか分からないくらい腕がたつ。第三階層街では、一番の手練れと言っても過言じゃないな」

「ならば、任せられそうだな」

「俺には信用ないみたいなんだけど、反論したほうがいいのだろうか。」

それよりも、厄介なことになった。ああいうタイプ、苦手なんだよな：何故だか、名前知られてるし。俺には会った覚えのないのに。それに、あのペンダント。嫌な予感がする。こういうときの嫌な予感は、大抵当たるんだよな：ホントに。

しばらくして、リカリアがギルド長室に現れた。表情は先ほどと変わっていて、鋭い刃のような瞳をしている。けれど、ふわりと柔らかい雰囲気もある。

執務机の前まで歩くと立ち止まる。定位置：らしい。

「ホーランド。すまないが明日、彼に第三階層街を案内してやってくれ」

「はい」

「私の古い友人のご子息だ、失礼のないように」

「承知いたしました」

ホーランドが一礼し、さらにジルに一礼すると踵を返して扉へ向かう。途中、そふぁに座っている俺に軽く礼をする―隠れてにやつと笑った―と、扉の前で一礼して出て行った。

「よく出来た騎士だ。さすが、右腕というだけはあるな」

ジルが感心したような声音で言う。まるで、俺にあてつけているようにも取れるけれど。

「まあな。あいつは最年少で騎士になったからな：あのくらい出来ていないと、認められないんだ」

明日の予定が決定した後、長かった時間は終わった。今夜の宿代わりである寄宿舎に連れて行かれた俺は、二人分の夕飯を作らされる羽目になった。ジル曰く「そのくらい出来ないと生きていけないからな」だそうだ。

「ほら、まだ病み上がりなんだから。さっさと寝ろ」
働かせたのは誰だ。

文句を言いつつも、やはり疲れていたようだ。

目を瞑れば、すぐに眠りに落ちてゆく…

2

「あれが第三階層街中央区の蔵書館です。第三階層街の歴史や文化などを調べるためには必要な施設です」

昨日のリカリアはなんだったんだ、と思わせるくらい完璧な仕事だ。どう考えても、昨日の姿からは考えも付かないほどの丁寧さと敬意を感じる。

…が、正直落ち着かない。

「あのさ」

「…はい？ なにか、至らないところでもありましたでしょうか？」
これだ。

完全に仕事であることを自覚させられ、且つ、それ以上近づけさせない対応。

「昨日のはなんだったんだよ」

「あれは、任務時間外でしたから」
分かっているやっっているな、こいつ。俺は敬われる立場になったことがないから分からなかったけれど…前に、知が言っていたことが分かる気がする。これは「いい気分じゃない」だろう。

「話したい」

「それでしたら、ここで」

「二人だけで、だ。聞かれたらまずいのはそっちだろ」

俺の厳しい視線を感じたのだろう。リカリアはため息をついて辺りを見回し「そうですね」と言っって中央区の大通りを少し外れたところにある武器屋に俺を案内した。

「ごめん、ちょっと部屋借りる」

なぜか店員にそういうと、俺を連れて店の奥に歩いていく。慌て

てお辞儀をして付いていくと、階段降りて地下へ：って、ええ！？
「ここなら、誰にも聞かれない。保障するよ」

いきなり砕けた口調になる。絶対にこっちが地だろうに、知とい
りリカリアといい、よく分からないことをするとつくづく思う。

「で、話って？」

もう少し待ってんでもいいじゃないかと思わなくもない。

「ああ。その：まず、ペンダントのことなんだけど」

どう言ったらいいのか分からない。俺が感じている違和感と疑問、
それをどう言葉にしているのか：簡単に、してみると。

「それはどういふものなんだ？ 俺は始めて見るけど：、初めての
ような気がしないんだ」

そう、こういうことになる。もちろん、すべての答えが聞けると
は思っていない。ただ、その取っ掛かりでもいいから訊いてみたか
った。

「ふうん：やっぱり、そっか」

一人で納得したりリカリアだったが、当然俺にはわからない。とい
うか、その回答では説明する気あるのかすら分からない。

「うん、なるほど。ん：：分かりやすく言う」と

「俺、そこまでバカじゃないからな、一応言うけど」

「分かってるよ。どう説明したものか、考えてるだけだから」

なんだか昨日始めて会ったような気がしない。あるいは、初めて
ではないのかもしれないけれど。

「ボクはリカリア・ホーランド。リカーリヤ・ホーランドって、聞
いたことある？」

リカーリヤ・ホーランド。確か、この国最古の女王だったはずだ。
この国が『階層街』を作る前の最後の女王で、最後まで『階層街』
化を反対していた女王だったはずだ。

「その女王がご先祖様ってことか？」

「そう。そして『思い出せないようになってる』と思うけど、リ
カーリヤ・ホーランドは龍人との交流が出来る最後の人間だね。龍

人とりカーリヤは未来のことが視通せる力を持っていたらしくって
：自分の子孫たちのことを危惧して精霊と交渉をした後、精霊の力
を引き出すための術をかけた道具を作り出したんだって。その内の
1つが、これ」

再び懷からそれを取り出す。リカリアの瞳が赤く染まる。

くらり、と浮遊感。あるいは、既視感かも知れない。リカリアと
誰かの影が、重なる。

燃えるように真っ赤な髪、その長い髪と同じくらい真っ赤な瞳を
した可憐で純粋な少女。

二人、あるいは一人は同時に口を開く。

『思い出さなくてもいい、刻んでおいて。あなたのやらなければな
らないこと。あなたの記憶は、それを知っているはずだから』

第七層 夕陽色

0

旅人は求め続ける
骨を抱いて立つ鍵を
一つ目の鍵を手に入れたとき
旅人は旅を終える

1

「…ん」

目の前に広がっていたのは、見覚えのない風景だった。いつものことで、これが夢だと分かる。

―これ、で…最後…ですね。

神殿のような荘厳な造りの薄暗い広間に、誰かが横たわっている。近付こうにも夢の中では自由が利かない。

―そのような心配そうな顔をなさらないでください。私は、大丈夫…ですから。わたくし

顔を上げれば、女性だと分かった。人間…のようで、そうではない。少なくとも、俺のいる時代の人間じゃないだろうと推測できる。額には小さい透明な球が頭環とうかんとして飾られ、その中に揺らめく光がある。しかしその光も風前の灯のようだ。頬には火傷あとのような痕、起き上がれば身に着けている衣服もぼろぼろになっていた。元は綺麗な装飾の施された衣服だっただろうことだけが分かる。

―これが私の今代の務めならば…果たして、みせます。誰よりも辛

い、貴方の救いとなるように…

よろよると立ち上がり、床に転がっていた杖を手取る。簡素な木製の杖で、大きな目の石のようなものが埋め込まれている。

「今更、ですよ。私は、考えを変えるつもりはありません。最後は、私だけの力で成し遂げなければなりませんのです。」

俺よりも低い位置に立つ女性は手に取った杖を両手で持ち、それを床と垂直にして腕をこちらに伸ばす。

「他の王との契約時でも、それは明白になったはずですよ。私は…私は、満足ですから…」

女性がぼそりと何かを唱えようと、女性の周りに光が文字となって宙を踊りだした。それらの一部は床に法式を描く。彼女の周りだけに光が集まり、幻想的な光景が現れる。女性は杖を片手に持ち直して、文字となった光に杖の先端を向けて杖を振る。すると、杖の通りに文字が現れていく。単語の羅列であった光が文として成り立つ瞬間だった。

思い通りになったのだろう、女性は杖を下ろして体重を支える。こちらを見る瞳には、涙が浮かんでいた。

「さようなら、また…逢いましょう。今度は…平和になった、世で…ふわりと微笑む。同時に、床の法式から光が噴出して女性を包む。それは、一瞬だった。」

光が収縮し、霧散した後に残されたのは。

倒れた女性と、

その手に握られた最後の――

「…な」

唐突に意識が浮上して、目を開くと夕陽色一オレンジというらしい一瞬の瞳があった。

「うわっ!？」

「あ、起きた」

にこりと笑って、離れていく瞳。

そんな近くで何をやっていたんだこいつは。

「ちよっとの時間だけだったけどね、倒れてたんだよ？」

「あ、そ…そう」

目覚めの衝撃で何の夢を見ていたのか忘れてしまったじゃないか。あれは…大切なものだった気がするけれど。

「ちよっとって、どのくらい？」

「本当にちよっとだよ。1時間くらい？」

「そ、そうか…ごめん、迷惑かけた」

まだ少し頭が痛む。起き上がると、体に外套がかけられていることに気がついた。

「いや、それくらいはなんともないよ。ボクも貴重な体験させてもらったからね」

「…貴重な体験？」

「ん…ん、なんでもない」

何だそれは。

「じゃあ、そろそろ戻ろうか。顔洗わなくて大丈夫？」

「ああ、平気だ」

立ち上がってリカリアについていく。

「というか、第三階層街に地下なんて作ったら底抜けないのか？」

「…え？ 抜けないよ？ そんなにやわじゃない」

苦笑しながら上階に出る。リカリアが「お邪魔したね」と言っ
外へ出る。

それにしても、随分と長い間あの場所にいたと思っていたのに…
本当に短い間だったんだな…と考えていると、その考えが顔に出
ていたのだろう。リカリアが丁寧な口調で説明してくれた。

「あの場所は通常と時間の流れが違うのですよ」

「どういうことだ？」

「その話はまた今度にでも」

その後、中央区を案内された俺は夕方近くに騎士ギルドに戻った。

「どうだ？ 主^アの様子は」

「相変わらず、だな」

机をはさんで対面に座った男^{やつ}が答える。

「相変わらずか…まだ無理だろうな。時期じゃない」

「分かっているよ。前回よりは少し早いけれど…これから俺達がすることを考えれば早いうちに押さえておく必要があると思ったんだが」

「だが…早すぎるのは考え物だぞ？ 前々回はそのおかげで大変だったじゃないか」

「あれは俺のせいじゃないだろう。どちらかといえば、お前のせいだ」

「俺は格下だからな…直接の関係はないっておこうか」

目の前に出されているカブバティーを飲む。第三階層街の特産品の1つで、この標高でしか作ることの出来ない茶の葉を用いた茶だ。「直接でなくとも大部分の間接的な関係はあるんだろう？」

「…今はその話は置いておけ」

よし、後で蒸し返してやろう。

「で、だ。時期が早いにしても…そろそろ兆候は出ているんだろう？ それすら見られないならまずいと思うが？」

「…俺には、見られないが。そもそも、俺はそういうのには疎いんだ」

「ああそう」

「そう睨むな。俺より鋭いやつは他にいるから」

「上に、だろ？」

「上に、だけど」

互いに苦笑する。こいつの言うことも分かるが、今の俺では無理

だ。

「それで？」

「ん？」

「あいつに任せるのか？」

「固有名詞を出さないから何を言っているのかが分からない。

「ええっと…」

「いや、分からないのならいい。出る前にまた話そう」

「そうだな」

そろそろ、頃合だろう。

「じゃあ、また。このカブバティー…お前は二度と入れるな」
味が出すぎて美味しくない。

「…ええ！？ これでも大人気なんだぞ？」

「そりゃあ、お世辞っていうものだろう」

――

―それは本当に唐突だった。

夕方。世界を染めている色を眺めていたら、突然だ。

「なあ、リカリア」

「…はい？」

騎士ギルドの待機所に戻った俺達は、ジルが街から帰ってくるのを待っていた。

…どうでもいいけど、本当に誰もいないなこのギルド。

「俺、思い出したんだ」

その言葉に驚いた様子もないリカリアだが、心なしか楽しそうに見える。

確実に楽しんでいるに違いない。

「何を、でしょうか」

「そのペンダントの仕組み」

「仕組み？」

説明されていないことも、全部。

「それだけですか？」

「うん。それだけ」

「なるほど。それで？」

その瞬間次の言葉が頭に浮かぶ。言うべきか言わざるべきかの判断は付かないけれど。

「俺に従う気はあるか？」

微笑したリカリアは端の席に座ったままの俺の傍まで歩いてきて、
ひざまず 跪く。

「全てを理解した、そのときには必ず」

それは騎士が主に向けて向ける最大の敬意の表し方。代々騎士が自らの主と認めた人だけに行く、主と騎士だけが交わす契約の証。

「それまでは？」

「もちろん、ボクはボクのままで」

リカリアは立ち上がり、イタズラっぽく笑った。

「あ：そうだ。言わなくちゃいけないことがあったんだ」

突然そんなことを言って、また対面の席に座る。

「分かっていると思うけど、ボクは女だからね？ リカリア・ホーランド、現在20歳です！」

語尾に記号が付きそうな勢いで言った。

：顔のわりに歳いつてるんだなあ：。

「ちなみに禁句は『童顔』と『女の癖に』と『顔の割りに：』です。言ったやつは例外なく地獄を見ているのであしからず？」

なぜそこで疑問形？

「だから気をつけてね、コウ」

「：あ」

始めて名前を呼んだ。今まで一度も呼ばれなかったのに…

…決めたはずなのに。

…俺は…

第七層 夕陽色（後書き）

如何でしたでしょうか？

次の更新ですが、

作者がテスト期間のため来週はお休みします。

そのため、2月になります。

すみません…

ご意見、ご感想などありましたら是非よろしくお願いします。

第八層 第二階層街

0

次なるものは路に行く。

受け継いだ物を引き継ぐために。

1

数週間が経ち、俺はジルと共に騎士ギルド本部管轄・『^{アーチ}天空橋』内、フロウ・ゲートの前に居た。目の前には騎士ギルドの長が立ち、その後ろにリカリアが控えている。

「では気をつけて。上は…ここより厄介だと聞く」

「ああ。認可されるかが心配だが…こっちは任務だからな。個人的な私怨では動けないだろ」

「だろうな」

苦笑を浮かべる2人を見ながら思う。こいつら、本当は仲良いんじゃないか？

「コウ」

「ん？」

リカリアがぼそりとつぶやいた。隣の2人には聞かれたくないらしい。

少し離れて、リカリアと向かい合う。…リカリアのほうが背が高いのは仕方ないと思う。

「ほら、これ」

右手を掴まれて、掌に何かを握らされた。何だろう？

「コインの形で偽装してはいるけど、ボクと通信できるように設定されてるんだ。これで、いつでも……ってわけにはいかないけど連絡が取れる。もし、全てを思い出した時には、ボクはこれをつかって自動的にコウの元に行くようになってるから」

それはそれは、凄いなあ……

「だから、なくさないでね？　ボク、転送された瞬間に硬貨箱を破壊なんてしたくないから」

「あ、ははは……」

なくさない自信なんてない。

「目印は、側面のこの紅い色。力の一部が入っているから分かんと思うんだけど……」

「努力するよ」

「……約束はしないんだ……。まあ……いいや、で、それを持ってる仲間間の反応も分かるようになるから」

始めて聞く単語だ。仲間？　こいつみたいなやつが他にもいるのか？

「全部で7人。ボクと、コウを含めて7人いる。探して」

「探してどうするんだよ？」

リカリアはイタズラを思い浮かべた子どものような表情で俺を見た。

「それは、ボクが言うことじゃないから」

問い詰めようとして、ジルに呼ばれた。どうやらもう出発するらしい。

「じゃあ」　（ギルド長）

「ああ」　（ジル）

「お気をつけて」　（リカリア）

「……………」

俺にとっては初めての経験だ。前は寝ているうちに昇ってしまっていたわけで。

「一瞬だから、そんなに面白くないぞ？　快速ゲートのほうが面白

いんだけどな」

「……………」

面白さは求めていない。

ただ、面倒なことになってきた。なんだか分からないものために仲間を集めなければならぬらしい。そのための目印がこれで、反応したらそいつが仲間。そんな仲間探しなんてやりたくない。

「じゃあ、行こう」

その瞬間、全てが光に包まれた。

――

「リカリア支部長、よろしかったのですか？」

「何が？」

コウたちがいなくなった後、ギルド長と呼ばれていた男性が歩き出したリカリアの後に付いて歩く。

「彼らと共に昇れば、お父上に――」

そこまで言った途端、くるとリカリアが振り返った。にっこりと微笑むが、その瞳は冷たい。

「…他言無用。その意味、分かる？」

「…はい。申し訳ありませんでした」

慌てて頭を下げると、リカリアはまた歩き出す。

「始まるんだ…」

「…はい？ 何かおっしゃいましたか？」

「ううん。なんでもない」

2人は廊下を歩いていく。

光が去り、始めてみた景色はそれまでとは違っていた。

無法地帯でギルドによって統制されていた最下層街、自由に貧しいながらも楽しく生活をしている第三階層街、そのどちらとも違う街並み。まず、家がでかい。そして広い。一体何のためにこんな広い土地を使っているのかが分からない。第三階層街よりも土地的には倍くらい狭いはずなのに……。そして、道はレンガで固められ、その上を車輪の付いたへんなものが走っている。馬車も走っているけれど……。あの道じゃ馬が可哀想だ。

「ここが第二階層街。主に富豪や貴族が暮らしているところだ」

「金持ちの居場所って訳か……。なるほど。門の前に立っているやつらがやたらと殺気をふりまいていていると思ったら……」

どの家にも、必ず二人は立っている。

「ここは中心街だから……。少し外れたところはここよりも穏やかだぞ」

ふうん……。侵入のし甲斐がありそうだ。金持ちの家なのだから、さぞ良いものを溜め込んでいるんだろうな……

……って、おい、俺。何を考えているんだ？ 俺はもう、盗賊じゃない。

だけど。こいつらの金を少しでもいいから下にばら撒ければ、少しは生活が楽になるんじゃないかと思う。

「さあ、こっちだコウ。車をつけてある」

「くるま？」

さっきのへんなものだ。車というらしい。

「これ、どうやって動いてんだ？」

乗り込んで窓の外を見ると、景色が動いていることに気がついた。

「動力は『精霊核』だ」

「…こあ？」

「そう。コピーだけど」

「なんだそれ？」

向かい合って座っているジルが、少しだけ俺を見た。何かを図るような瞳をしているが…

「なんだよ？」

「いや…到着に少し時間がかかるから、説明しようか」

ジルは御者のような人物に声をかけ、スピードを落とさせた。そして俺に向き直ると口を開いた。

「まず、精霊の存在は知っているか？」

その声はまるで子どもに話しかけるようだ。

「…えっと…実体を持たず、エネルギー体が意思を持って形を成している生き物？」

「半分正解。実体を持たないわけじゃない。精霊の属性によって傾向はあるが、自然界のものに宿っているんだ。例えば、水や草、花などはその代表といって良い」

「人工的なものには宿れない…のか？」

「そう。あくまで自然界のものに宿る。そして、自然界のバランスを保っている」

「ふうん…」

くるまは中心街を抜け、舗装されていない道を走る。

「ただし、現在ではほとんどが認識されていないから、人々はその存在を忘れつつある」

「まだいるってことか？」

「そう。いる。コウには分かるはずだけど？」

…なんでそんなことが分かるんだ？

「見えないが声らしきものは聞こえる」

ジルは頷く。

「大抵は見えても声が聞こえずに意思疎通が出来ない。僕もそう。意思疎通が出来るのは、霊位の高い者だけらしいけど」

「霊位？」

「：ああ、聞き流してくれていい」

ジルは窓の外を見て場所を確認した後、話を続ける。

「簡単に言うと、精霊核^{コア}は精霊の力を引き出すための道具だ」

「精霊の力を：？」

「そう。精霊には特別な能力を宿しているものが多い。物を浮かせたり、水を出したり火を起こしたりがその代表的なものだ。もちろん、精霊によって個体差があるから必ずしも有力な能力が引き出せるわけではないが」

「よくわかんねーけど、特別な力を使うために必要なんだな？」

ジルは苦笑気味に頷いた。：このくらい簡単に説明しても罰は当たらないと思う。俺に難しい話をするのが悪い。

「そう覚えておいてくれればいい。1つの精霊核に1人の精霊の力を引き出すための術を封じ込めておく。そうすることで、彼らから力を引き出すことが出来るというわけだ」

「：それがこれと何の関係があるんだよ？」

「これ：正式名称は『小型自動艇^{オートライトカー}』というんだけどね。これの動力として、その精霊核を使っているんだよ」

「でも、同じ能力は得られないんじゃないのか？」

「本物の精霊核じゃなくて、それを元に開発し試験的に導入している『精霊式^{モード}』を使っているんだよ」

：よく分からなくなってきた。

「そろそろか」

ジルが窓の外を見る。つられて見てみると、自然の景色の中にドカンと大きな城が建っていた。

「：なんだあれ」

「アレが第二階層街を支配しているパヴェロ公爵家の屋敷だ。早々に認可させて早く出よう」

：珍しいな。ジルがここまで相手を嫌うなんて：。

俺達はそのまま城に向かった。

第九層 パヴェロの城

0

―階層街史『崩壊の巻』より抜粋

彼はそうして流されたのだ。

今ではただの人としてしか持ち合わせていないけれども。

1

城に近づくたびに、何故だか嫌悪感を感じるようになった。ジルの嫌悪感がうつった…というわけでもないだろう。

第二階層街でも一際目立つ風貌。真っ白な城壁に、真っ白な門に真っ白な…全部が白い。窓まで白いつてどういうことだ。

「あれ…」

「パヴェロ家の現当主が無類の穢れ嫌いだね。城で統一することで汚れを目立たせたいらしい」

「趣味悪いな…」

使用人がかわいそうだ。

「中也全部真っ白なのか？」

「もちろん。内部のほうも真っ白だ」

「最悪だ」

だんだん近づく城は思った以上に巨大だった。支配しているのなら必要なだろうけれど。

このくるまには馬車のように紋章が張られているわけじゃない。門の前で止められて、警備兵が中をのぞいてくる。はじめに俺を見て、いぶかしげな表情を浮かべた警備兵はジルを見て一層顔をしかめた。

「約束は聞いていませんが」

「研究所からの命令でこの子を引き取った帰りだ」

「約束は」

「…ない」

ジルがイラついているのが分かる。こいつ、こんな冷たい雰囲気も持てるんだな…

「では、お引き取りください」

警備兵は取り付く間もなく背を向けた。…仕方ない。

「コウ、動くなよ」

低く小さな声で釘を刺された。けれど、こういうときこそ俺の役目だ…いつもそうだった。

「大丈夫だ」

俺は警備兵に近づく。もちろん、相手は警戒して俺を睨みつけている。子どもの顔、子どもの顔。

「すみません、俺、兄さんを探しているんですけど、何か知りませんか？」

「そんなこと、そこにいる父親に訊けば良いだろう」

「まあ、そうなんですけど…」

振り返ってジルを見る。しかめっ面で腕組みをして、こちらを見ている。

「ちょっと」

門の左に立つ警備兵の右腕を、右腕で掴んで引く。警備兵は怪訝な顔をしながらも腰をかがめる。

「父さんと兄さん、かなり仲悪くて。だから、父さんの前では兄さんの話は出来ないんです」

「だとしても、俺たちのようなものが知っているわけないだろう」

俺は「そうですよね」と残念そうな顔でお辞儀をする。警備員の表情が、少し緩んだところは見逃さない。

「ああ、そうだ。おい」

警備兵は右側に立つ相棒に声をかける。ジルと話した警備兵はその表情を陰しくしながらこちらに来る。その間も、くるまを睨みつけていた。

「お前最近まで第二階層街をふらふら歩いてたんだろ？ 何か知らないか？」

「何がだ」

「この子、兄を探しているらしい」

「：ジル・フェリスの子どもは引き取ったお前だけだろう？」

こいつ、なかなか頭が回るな：。

俺は右腕でその警備兵の腕を掴もうとして――

「触るな」

弾かれた。

「早く戻って引き返せ」

「：分かった」

俺はくるまに近づく。それを待ちわびていたかのように、くるまの動力が動き出す。

「：解除^{ロール}」

その瞬間、警備兵二人はびくりと体を震わせる。

「お待ちください」

「：え？」

「どうぞ、中へ」

「：だそうだぜ」

ジルを見ると剣呑な目つきで睨まれた。

くるまに乗り込み、城の中に入る。ジルは無言で窓の外を見ているだけだった。

部屋に通されると、俺たちはどちらからとも無くため息を吐いた。ジルは目を覆って、部屋を見たくも無いようだ。俺だってここに来るまでに目がくらくらしした。

門も白、廊下も白なら壁も天井も白。ただし、どうしても汚れてしまう絨毯は赤だった。汚れが目立たない黒にしまったのは、黒という色自体が嫌いだからだとか。

「ここまで来ると、もうどうでもよくなる」

俺は比較的眩しいのには慣れているから良いけれど、普通の人からしたら眩しくてたまらないだろう。

「とにかく早く帰りたい」

ジルがこれまた珍しく弱音を吐いた。

「ま、まあ：もう少しだろう、きつと」

「いや。やつは来るまでにかなり時間がかかる」

「：そんなに忙しいのか？」

「いや」

「即答断言：」

ジルがここまで断言するからには、そうなのだろう。

実際に、城主―だと思うけど―が来たのはそれから3時間後だった。

でっぷりと太り、嫌味なくらいの笑顔で歩いてきたその男は、典型的な『けんいしゅぎしゃ』である。：と、待ち時間にジルが話していた。

「お待たせしてすまない。仕事を立て込んでいたものでな」

「ならば湯上りのような肌は何だ」

「おお？ いやいや、これは礼儀というものだ」

「礼儀というなら人を待たせておいて風呂に入るな。あと、お楽し

みだったようだがさっさと出て来い。礼服を着ろ」

…機嫌、悪いな。

「…ふん。貴様にそんな事言われたくはない」

よく見ると、こいつ…どこと無く、ジルに似ているな…特に目の辺りとか。

「用件は何だ。さっさとここから出て行け」

「この主は客に対して失礼しか出来ないのか？」

「生憎、貴様のようなものを客として迎えた覚えは無いのでな」

このままやり取りが続くのかと思っていたら、ジルがため息を吐いた。いつの間に用意していたのか、一枚の紙を出す。

「これを見れば分かるだろう。研究所からの任務の最中だ。事故で直通快速フロウ・ゲートが動かなくなったため、早急に通行許可を頂きたい。断れば…分かっているな？」

—本当に、珍しい。ジルが脅しをかけている。普段なら、穩便に笑って済ますところだろうに。

ふん、と鼻で笑って、にやりと表情を変化させる。

—典型的過ぎて、嫌な予感。

「断るな。こちらはそのような通達は受けていない。本来なら、先方から事情を説明し、依頼するべきだろう？」

「そのような暇がないのだ。研究所はお前に関わるほど暇ではない」

「…なんだと!？」

「行けと、一言言えばいい」

「丁寧、貴様の家の『正式な頼み方』で頼めば、認めてやらんでもない」

「そんなことをする必要すらない」

「…聞いていれば、立場をわきまえない無礼な発言…」

「それは同じだ」

「…とにかく、許さん」

ジルは相変わらずその方向を見ようとししない。

そいつ—名前は未だに覚えていない—はもこもことした衣服を羽

織っている。というか、服に羽織られているという表現が合っているかもしれない。袖元に：あれは、：血？だろうか。

よく見れば：本当に目を凝らしてみれば、大きささまざまな血痕のようなものがついていることに気がつく。俺が居たギルドの中でも、このことに気がつくのは俺の師匠であるジィちゃんと、その弟子の俺くらいだろう。心さんが、ぎりぎり：という感じだろうか。知^{つかさ}は絶対に気がつかない。

：あいつは、純粹すぎるから。

と、俺の視線に気がついたのだろうか？そいつは、俺をちら、と見る。

「その小汚いのが『大いなる犠^{やみ}牲』か。こんなちっぽけな存在のために、どれほど多くの金が―」

「口を慎め、ガキが」

今までじっと座っていたジルが立ち上がり、そいつに歩み寄る。

その手で襟を掴もうとして―

「わ、うわ!!」

突然の声にそちらを向き、倒れ始めている少年を左手で、その手に持たれているお盆を右腕で支えた。

第十層 少年

0

先へ続く大事な一歩

彼はそれを大きく昇ることによって先を急いだ
それは必ず終わると信じて

終わることのない一歩が
始まったのだった

1

面会が終わって少年が案内した場所は風呂場だった。

少年を支えたジルは体勢を崩さざるを得ず、少年が持ってきていた飲み物が俺に降り注いだからだ。

—こんなことなら、支えようと駆け出さずにいればよかった。

「あの、すみません。そっかしいもので」

少年はしきりに恐縮している。タオルと変えの着替えを持ち、城で働くやつらが使うのだという風呂の脱衣所に籠を置き、その中に持っていたものを置く。

「いや、俺は別に、いいんだけどさ」

こんなことには、慣れているといえは慣れている。一番酷かったのが、知^{つか}が—

…いや。なんでもない。何でも、ないんだ。

「…? どうかなさいましたか?」

いきなり黙り込んだ俺に、不思議そうに問いかける少年。
そういえば、名前を聞いていなかった。

「名前、なんていうんだ？」

「え。あゝ…はい、ユウと申します」

「ユウ…か。俺は…コウ。コウ・フェリス。よろしくな」

「え、え？ あ、はい」

俺が差し出した手を困ったように眺める。

「えっと」

「どうしたんだよ？ 挨拶だぞ？」

…もしかして、この階層街ではマナー違反なのだろうか？

住む場所と環境が違えば様式も違う…そうジルが言っていたことを思い出す。

まあ、握手しないならしないで。

俺は腰の帯を外し、両手を交差させる格好で服の裾を持って着ていた服を上げる。と、ユウは慌てて背中を向けなにやら迷った挙句、
「あゝ…」とか「うゝ…」とか唸ってからぼそりと小さい声でつぶやいた。

「あの、私、実は、女、です…」

「…え？」

今、何て？

「私、実は女なんです…証明しろと言われれば、えっと、服、脱ぎますけど…」

…え、え？ いやいやいや、ちよつと待て。落ち着け俺。

俺は顔の半分を服で隠した状態でじっと見つめる。

.....

.....

.....

そういわれれば、そういう気がする。
女だと言われれば、そんな気がする。
服装は、俺と同じだけど。
だから少年と判断したんだけど。

というか、こいつ：滅茶苦茶わけの分からない発言しなかったか？

「えっと、証明…します？」

「ま、まて、早まるな？ 話せば分かる！」

俺は慌てた。

そりゃもう慌てた。

こんなことが知にばれたら――

…ってだから、あいつは関係ないんだって。

「いい、大丈夫。信じる。おっけー？」

「はい」

こくんと頷く。よし、これで変なやつにされずに済んだ。

「とにかく。俺身体流すから」

「では、私がお背中を流させていただきますね？」

「…はい？」

何でそうなる。

というか…こいつ、俺に構っている暇があるのだろうか？

「お前、ここで働いてるんだろ？」

「はい」

「こんなところにいて良いのか？ あのジジイに怒鳴られんぜ？」

俺は服を脱ぎ――右腕全てを覆う包帯は外さないことにして――持ってきてあったうちの一枚のタオルを腰に巻くと風呂場へと歩く。

「私の主人はただいま学校へ行っておりますから。それに、その間にしておくことは済ませてありますので」

パタパタと付いてくる足音。俺は扉の前で止まる。

「いや、って言うか…」

と、その先を言おうとしたところで――

「あうっ!？」

その声で振り返ると、なぜか籠に引っかかって転んだユウがこちらに倒れてきて、あろうことか空を切るはずの手は俺の腰のタオルを掴んで――

「ちょ、っと、おい!」

いやいや、何だそのベタな展開。転ぶなよ、そんなところで。

「いたい…」

ユウが顔を上げる。ユウの手には、いつの間にかタオルが握られていて――

――あ、なんか嫌な予感。

「……………っ!?!？」

驚いたユウは手にあったタオルを俺に投げつけ、顔を両手で覆った。耳が真っ赤になっている。

叫ばなかったことは、褒めてやろう。…いや、叫ばれても叫ばれなくても、シヨックだ…なんか。

「ご、ごめんっ」

俺は急いでタオルを掴んで風呂場に駆け込む。

…災難続きだな、俺。

2

俺は無事に――結局背中を流してもらったが――風呂に入り、ユウのものだと言う騎士見習いの服を借りた。サイズがほとんど変わらなかったのには、なんというか…ちよっと落ち込んだ。

「ご、ごめんなさい」

ユウはまだ謝っている。これで39回目だ。

「大丈夫だよ。それより、ジルはどこにいるんだ？」

「：はい、フェリス様は：コウをよろしくと言って一度騎士ギルドへとお戻りになりました」

「俺を置いて？」

「そうなる、かと」

あいつ：俺を口実にしやがった。というかそうしないと二度と来たくないんだろうな：と思う。多分、当たっているはずだ。それと、ここへ入るきっかけを作った俺に対する嫌がらせか。根に持ったのかよ：

「どうしよう：どうすればいいんだろ」

思えば、最下層街から抜け出した後はずっとジルと一緒にいたんだっただけ？ 途中で変なのに連れまわされたけど。

でも、色々なことを教えてくれたのは確かだ。：認めたくはないが、知るものが誰もいない土地では頼らざるを得ない。けど、今度は一人だ。俺のことを知る人はいない。俺は、どうすれば：？

「私の主に聞いてみます。もうそろそろお帰りのはずですから：」

ユウは困ったように呟いた。

「あゝ：ごめん。迷惑かけて」

「い、いえ、とんでもないです！ それならば、私のほうが：」

こんな調子で堂々巡りになりそうだ。

話を変えるか。

「そういえば、ユウの主って誰なんだ？ あのジジイじゃないのか？」

ユウはきよろきよろと辺りを見回す。

「この城内で、そのような言葉は慎みください。どこで聞かれているかわかりませんから：」

「え？ あ：」

あの城主。多分、相当曲がった性格してんだろうな：と思う。

あの返り血、風呂。攻撃的な言葉に態度。人を自分と対等に扱お

うとしないことが分かる。

「私の主は、あの方の…大だんな様の嫡男のリチャード様です」

「リチャード…」

「私と同じ年齢なのですが、お優しく慈悲深いお方です」

あの親からは想像できないけどな…：…そういえば、年齢訊いてなかったな…

「ユウはいくつなんだ？」

「え、私は、12ですけど」

「…はい？」

俺より3つも下だ。それなのに…

「何か？」

「い、いや…」

こいつ、俺が知る誰より…大人びた顔をしている。

「…あ…では、こちらへ。主…リチャード様をお出迎えしなければならぬので、行きましょう？」

――

ユウに連れられて来た場所は、今まで居た場所よりも綺麗で明るかった。

廊下、1つの扉の前で立っていると、向こうから歩いてくる人影があった。さすがに、俺より小さい。

―ちよつと安心した。

「ただいま、ユウ…って、どちら様？」

少年―今度こそ―は、素朴な服を着て片掛けの鞆をユウに渡しながら俺を見る。あのジジイからは到底想像もできないような、綺麗な顔立ちの少年だった。

「あの、この方のご相談が…」

「…？ うん、分かった。じゃあ、入って下さい」

その少年は、あのジジイからは到底想像もできないような、よく

出来た息子だった。

小休止 リカリアの昼休み（前書き）

これはコウ達が第三階層街を訪れる前の話になります。

それでは、どうぞ…

小休止 リカリアの昼休み

0

晴れても曇っても雨が降っても雷でも雪でも。
いるだけで晴れるのです。

1

「ふわあ…」

「そんなに暇なら、店の手伝いしてよ…」

行きつけの武器屋の主、幼馴染のサラがそんなことを言う。

「えー…だって、たまの昼休みだよ？」

「たまの昼休みって…毎日昼休みあるじゃない」

呆れながら、サラは伸びをする。

ここはサラの家が営む武器屋『リビングホープ』。ボクからすると、第二階層街で一番優秀な武器を取り扱っている場所と言える。

けれども、店自体が年季の入っている建物のためか、はたまた目立たないためか、騎士達への浸透具合はいまいちという隠れ家的な店。

まあ…かわいくておっとりして、癒しであるサラを他の男共知られたくない、という男共が言わないだけなんだけどね…。

「っていうか、匿って？」

「今度は何したの？ …リーちゃん？」

不穏な空気を感じ取ったボクは、サラが立っている支払い場の下に隠れる。

次の瞬間、ガラッと勢いよく開いたドアから入ってきたのは、多

分。

「サラ様、失礼と承知でお聞かせ願いたい：ホーランド様はこちらででしょうか？」

堅苦しい言葉の割りに、少年のような声。口調には、呆れた感じがにじみ出ている。

「ええっと：リーちゃんが、また何かしたのですか？」

「何かもなにも：聞いてくださいますか!？」

「は、はい、私でよければ」

気圧されるような形でサラは話を聞くハメになっていた。

「ホーランド様ってば、第三階層街自治書類整理とか、商人ギルド長とか市民ギルド長とか騎士ギルド長とか任務幹旋所所長の面会を全部すっぽかしたんですよ!！それも、寝坊で!！しかも、前日の夜に会合という名の飲み会があつて呑み過ぎたからって!！!！それだけならまだいいんです、ええ、もう日常茶飯事ですから!！それなのに!！!」

「：ま、まだあるのですか？」

サラは足元にいるボクの足を容赦なく踏みつけた。

「……………っ!! ………………っ!!……」

痛い。痛いけど、見つかったらお仕舞いだ。がまん、我慢するんだ、ボク!！

：あゝゝ!ダメだ、ヤバイ、涙出てきそう：訓練より痛い：よく考えたら、ピンポイントで小指だよ!？ちよつと、マジ、あゝゝ!！

「はい：今日から、やっと今日から、実技稽古付けてくれるって、言ってたのに：」

「あらあら：それは…」

悲しそうな声。ああ、そうだ。忘れてた。いや、忘れてないけど：もう、そんな時期だったっけ。

「分かりました。じゃあ、見つけておきますから。訓練所で準備運動しててください。見つけたらすぐに向かわせますね?」

「…え、あ、はい、わかりました…」

ガラガラ、ピシヤ。

「…リカリア・ホーランド第三階層街騎士ギルド特殊隊長？」

「…なんでしょうか」

「ほら、昼休み終わりまでもう少しありますから、出てきたらいかがですか？ お昼食べてないでしょう？」

「そうしましょうか」

ボクはゆっくりと出た。小指は痛いけれど…まあ、大丈夫だろう。

「何か言うことは？」

「ごめんなさい」

「よろしい」

ボクが頭を下げると、サラはにっこり笑った。奥にあるテーブルで手招きする。

「今日のおかずはー？」

ボクが近くに行き、テーブルの前に座る。皿に手を伸ばすと…あれ？

サラはなぜか、ボクから皿を遠ざける。しかも、テーブルに用意してあった食事をおいしそうに食べはじめた。ボクの分は…？

「ジャック君と訓練よ？」

そしてボクの背後を指差す。振り返ると、そこには―

「…え、」

「…行きましょうか、ホーランド様？」

サラを見ると、穏やかで優しい微笑みを返してくれた。

「は、謀^{はか}られたー！ー！ー！！！」

それからボクは、ジャックに稽古をつけ、商人ギルド長と市民ギルド長と騎士ギルド長と任務幹旋所所長の面会をこなし、日付が変わっても第三階層街自治書類整理をさせられている。

「うわー！ ひどい、労働力搾取だー！ー！！！」

「それ相応のお金を国から支給されているんですから文句言わないでくださいー！！」

「おーぼーだー!!!」

がちや、とドアが開き、ジャックにとっては仲間でボクにとっては鬼の秘書官が顔を出した。

「うるさいですよ!! 今何時だと思ってるんですか!!」

「ご、ごめんなさい……………」

「すみません、秘書のお姉さん」

今日もボクは日の出を見てから寝るんだな…。

でも、悪くないと思う。

これが平和というものだから。そして、これからは平和でなくなるかもしれないから。

この子を戦場に送り出さなくてはならなかったとしても、ボクは…

「ホーランド様？ 僕の顔に何か付いてます？」

きつとボクは…

「いや。ほら、早くしないと…外にいるおっかない鬼に怒鳴られちゃうから」

「…誰のせいだと思ってんですか…」

ぼそりとつぶやかれた文句を笑って流しながら、溜まった書類を片付けることにした。

…きつとボクは、後悔だけはしない。

そんなリカリアを覗き見るジャックの表情には笑みが浮かんでいることを、彼女は知らないままだった。

青年は苦笑しながら分厚い本を閉じる。

「それにしても、学習しないよな」

少女が短くため息を吐く。

「誰の影響ですか」

「少なくとも俺じゃないぜ？」

「当代は、ですけど」

落ち込んだ様子の青年を呆れた目で見やった少女は、睨みつけるように――決して睨みつけているのではないのだけれど――青年を見る。

「当代ではないのですから、気落ちせず」

「だよな！？ 心配してくれたのかー？」

心底嬉しそうに微笑む青年に対して、少女は分厚い本を指差し、

「はい、これの進度を」

と返したただけだった。

「…だよなー…」

青年はいつものように、あるいはいつもとは違うように、少女の頭を撫でた。少女もいつものように、あるいはこれもいつもとは違うようにじっとしている。

少女は暫くしてその手から逃れ、いつものように白い世界から出ようとする。

今日はその背に、いつもとは違う言葉が投げかけられた。

「同属が欲しいか？」

「あるいは同族がほしいのか？」

「同属は要らないか？」

「あるいは同族は要らないか？」

少女が振り返る。

その瞳は何も映されてはいないかののように、透き通っていた。

「あーあ、言ってしまった」

少女が消えた方向を見て、苦笑する。

「しまったあ、よくあんなこと言えたもんだ、俺も」

青年は閉じた本を開く。そこには、文字がびっしりと書き綴られていた。その文字は古代文字と称されるもので、既に廃れたはずの文字。

古代文字：別名『魔力文字』、あるいは『魔式文字』。

「さってと。言ってしまったものは仕方ない。俺に出来ることを、俺の限らない時間でやるとしますか」

青年は頁ページを繰る。

少女は振り返った。

その瞳には、一面の白が映っていた。

「：私は、私だけで。貴方が、貴方しかないように」
その中の、唯一の影。

少女に必要な、唯一の影。

「許されませんから」

ぺこりとお辞儀をして、少女は出て行った。

小休止 リカリアの昼休み（後書き）

いかがでしたでしょうか？

本編ではさくつと第二階層街に進んだ主人公達。

少しあっさりしすぎで、第三階層街の重要人物であるリカリアがよく分からないようなので、番外として載せてみました。

よろしければご意見ご感想をお願いいたします。

読んでくださった皆様に、感謝を込めて・・・

第十一層 穢れを嫌う城

0

やがて彼は本当の闇を見ることになる
それは自らのものか
それとも他のものか

1

リチャードの私室は、豪華であるけれども質素であつた。どこか、子どもらしくない部屋のような気がする。

「あの…お茶が入りましたので…」

居心地の悪さを感じながら部屋においてあるそふあに座っていると、目の前にカップが置かれた。

「ありがとう」

リチャード…ユウの主らしい少年はにこやかにそう言って、カップに口をつけると「美味しい」とつぶやいた。

ユウは俺の隣に座る…かと思いきや、俺の後ろに立った。

「ん？ 座らないのか？」

「え…あ、いえ、私は」

「折角だ。ユウも座りなよ」

ぽんぽんと自分の隣を叩いて、リチャードが呼んだ。おろおろと視線を彷徨わせたユウは、ゆっくりと首を振って戸惑いがちに微笑む。

「そう…」

…ん？ 少し、残念そうだな…？

「で、彼は一体？」

ユウは俺を見て、それからリチャードに俺を紹介する。

「こちらは、コウ・フェリス様です。先ほどジル・フェリス様がお見えになり、共にこの城へおいでになりました」

「…フェリス、ね」

思案顔——12歳の少年がするには早すぎる表情——で、俺を見る。

「はい。私が大旦那様とお客様にお茶を出しに行った所、私が躓いて…出しに向かったお茶を、かけてしましまして…」

「…ぷっ」

あははは、と笑い出す少年は、一瞬前の表情とはまるで別の…歳相応の無邪気な表情だった。真っ赤になったユウはトレーで顔を半分隠しながら続けようとする。

「そ、それで」

「あはははっ！」

「流して頂いている間にフェリス様がお帰りになったので、こちらに一晩泊めていただきたいのですけれどっ」

「はははっ、うんうん、分かった！ 僕の部屋を貸してあげるよ！」

「え、ええ！？」

俺が驚くところだろうに、驚いたのはユウだった。

「ん？ なに、駄目かい？」

眠れるならどこでもいいが…あの父親の息子だ。どこかに裏があると考えておいたほうがいいだろう。出来ればこの城から出たいところではあるが、ジルが許さないし…正直、この城で眠りたくはない。

「いや、駄目ってことはないけど」

「じゃあいいじゃないか。なんならベッド使ってもいいよ？ 僕はソファで寝るから」

「そ、そそ、それは駄目ですよ…」

慌てたようなユウの声に、微笑を返すリチャード。

「どうして？」

「だ、だって…」

「たまにはいいじゃないか」

「でもっ…お風邪を召されてしまいます…」

振り返って顔を見ると、赤い。…恥ずかしい、んだろうか。

…なにが？

「まあ、それはユウ次第だけどね」

リチャードを見ると、笑みに…なにか意味が含まれているようにも見える。

「じゃあ、俺がどつか別の場所で寝るよ。この時期だから、風邪を引くこともないだろ」

「え、えと…」

「客人にそんなことはさせられないよ。まあ、客用の部屋は用意できないけどね」

そりゃ、そうだろうな…あの父親から許しがもらえとは思っていないし。

「客じゃない。招かれてないからな」

「あゝ…そういわれちゃうと何も言えないなあ」

苦笑して、立ち上がる。

「じゃあ、寝るまではこの部屋でゆっくりしていなよ。父さんもここへは来ないし、他の侍女達も…ユウ以外は来ないから」

俺にそう言った後、「父さんのところに行って来る」とユウに言い残して出て行った。

2

夜。

俺は外套を借り、誰にも見られることなくリチャードの部屋の上

：つまり屋根の上で丸くなっていた。といっても寒くはない。陽が長く、暑い日が続く。真っ暗になる時間は3時間ほど：今もうっすらと夕陽が出ている。：今の季節は何と言うんだっけ。

それにしても、奇妙な城だ。この屋根、随分と赤黒いところが多い。これは：まあ、血だろうけれど。

汚れがきらいだという城主なら、屋根もキレイなものじゃないのか？あるいは：『キレイ好きだと思いたませたい』だけなのか。どちらであっても、嫌なところだ。

というか屋根に血の跡あとってどういうことだよ。上から降って：くるわけではないだろう。そんなことあったら穴だらけになっているはずだ。この屋根の素材はそこの家と変わらないし。だとすれば、運んできている：？

：いや、それはないな。だとしたらどこかに血の跡があるはずだ。いかに掃除をしたとしても、部分的に掃除をすれば俺が見逃すはずはないし：なにより、完全に取り除けるわけがない。血生臭さも残るし、まあ、この広さだ。たくさん人を雇っているとも考えられるし、城のやつら全員がグルになって隠しているのなら俺には分かるはずない。

っていうかそもそも俺には関係ないじゃないか。全く、未だにクセが抜けてないのか。

「……………さい」

ぼーっとしてしていると、何か聞こえた気がして起き上がった。いつの間にか―やっとも言うが―辺りは薄暗く、世界は夕陽色に染められている。

あいつに貰ったコイン、どこやったっけ？

「……………やです…」

ポケットにはないな。あ、なくしそうだからってペンダントにして首から提げたんだっけ。

あった。コインの側面を見ると、色濃く光っている。

「つまり、近くにあいつの仲間がいる……ってことか」

俺は辺りを見回した。と言っても、身を隠せるほどの出っ張りを背にしているから背後は見えない。そーっと覗いて見る。

俺は誰もいないことを確認してから移動を開始する。もちろん、立ち上がるなんてことはしない。靴を脱いで裸足になり、音を立てないように移動する。声は屋根の反対側からするようだった。が、目の前の血痕を見て、先に進むことをためらう。

「これ、まだ新しい……」

俺が居た屋根の端には古いものがほとんどだったのに、ここは新しく……しかも乾いていても触ると手や足についてしまいそうだ。脚はまだしも、手はまずい。

……ってことはあの城主、ここで返り血を浴びたってことになるな。迂回するのは面倒だ。それに、近づくほどコインの色が濃くなっている。

暫く探し回り城内に戻るべく外套を置いてきたところに戻ろうとすると人の気配がした。

「……そんなことを言っているのか？ ランよ」

その声を聞いて、足を止める。目の前には太い塔があり、窓が開いている。入り口は……俺の居た所の反対側にあるようだ。声が近い。俺は入り口から離れて、塔の反対側に回る。

「あの少女にあの事を話すぞ？」

「それだけは……」

「ならば従え」

城主と、そして聞いたことのない人……女性の声。

「フェリスの小僧を使って、研究所^{ラボ}に取り入る。そうだ、お前の娘とリチャードを結婚させよう。リチャードも従順な奴隷が欲しいだろうしなあ？」

息を飲む気配がした。

「そしてお前の娘も小僧と共に研究所に連れて行かせて情報を流させるのだ。やつらの企みを国に売り、その報酬として更なる地位を得る。リチャードは騎士として階級を上げ、第二・第三階層街をまとめ、最下層街を支配する…」

「あの娘にそんなこと…」

「させないとは言わせないぞ？ あの手を話してもいいのなら、それでもいいが…」

「そんな…」

「大筋はこんなところか。細かいことはまた後で練るとして…」
「…う…」

どさりと倒れる音がした。塔に耳を当てて集中すると、階段を上がるような音がする。そして扉が閉められる音、鍵をかける音が続き、もう一度階段を踏む音がする。…屋根から戻るには、さっき俺が居た場所の出っ張りから階段を降りるしかないようだから…外套は見つからないだろうが、この位置では俺が見つかりそうだ。

どうするかな…

第十二層 屋上の塔

0

―『階層街史 偉人の章 始まり』より抜粋

知らなかったものは多い
中でも一番初めに覚えるもの
彼は忘れたのだ、
自らを犠牲にして。

1

絶対絶命のピンチ、ってどこか…。
右か、左か。
俺は塔に張り付き、耳を澄ませる。
辺りは既に真っ暗で、影が1つになるほどの闇。
暫くすると扉が開き、そして閉まる音がした。ガチャリと言う音
と共に、足音と…そして手持ちランプの光が漏れた。
光は俺の右側に多く漏れている。
ゆっくりと音を立てないように、光と速度をあわせながら左にず
れる。

ぐるりと半周したところで、光は遠ざかっていった。ゆっくりと
覗き見ると、屋上からの出口に向かって歩いていき、屋根につけて
ある扉を持ち上げる。そしてだんだんと降りて行き―俺は顔を引ッ
込めた。

扉を閉じるために振り返った瞬間に、見つかっていないといいけれど。

ドアの前に立ち、ゆっくりと深呼吸する。光は近付いていないし……人の気配もない。よし、これで大丈夫。

『やあ!!』

「うわあ!!」

声を上げ、慌てて口元を押さえる。

『どうしたのー?』

声は俺の胸元のコインから発せられている。

「ど、どうしたのじゃねえよ」

声を抑えて反論した後、急いで出っ張りを見るが誰も来ない。とりあえず外套を置いたところまで急いで戻ると、コインを引っ張り出す。

「何なんだよ……」

『ボクのこと覚えてる?』

「顔だけは覚えてる」

『ひどいなあ、リカリアだよ。リカリア』

細くゆっくりとしたため息を吐いて、コインを睨みつける。

「何の用だ?」

『ちよっと助言をしてあげようと思ってさ。起きてるみたいだったし』

「なんで分かる……っていうか、聞いてたのか?」

『何を?』

「いや、何でもない」

聞いてないに越したことはないし。

俺はもう一度寝転がって星を眺める。視界には第一階層街……この上の階層街の底があり、空を削り取るように黒く塗りつぶしている。『そう? まあいいけど。でね、助言してあげようと思って通信したわけなんだけど……その前に、教えておかなくちゃいけないんだ』
「何を」

明るい調子のリカリアの声は、急に低くなる。

『大切なこと』

「大切？」

『そう…通信の仕方！』

な…、何だよそれ。

『コイン握って、ボクの名前となえればいいからさ』

「あ、そう…」

『そんで、助言。近くに仲間がいるよ。この感じだと、緑かな？』

「みどり？」

この感じって、どんな感じだよ。それに、緑って…

『あ、やば、見つかる…じゃ、じゃあまた！』

「おい？」

どんなに呼んでも反応しなくなった。なんだったんだあいつ。

コインを服の中に戻し、塔に近付く。この人に話を聞きたい。

正面の塔の上、見上げると小さな窓がある。

レンガで造られた白い塔。あまり目立つことはしたくないが…靴を履いていないし、好都合か。

足の裏の汚れが壁につかないようにしてからしゃがみ、短く息を吐きながら跳躍した。普通なら届かないけれど、俺なら届く。

「よ、っと」

しっかり左手で窓枠に手をかけて身体を安定させる。力の調節もばっちりだった。久しぶりだったから、少しだけ不安だったけれど。右手をかけ、ゆっくり身体を持ち上げる。懸垂けんすいをしたまま窓から覗き込むと、女性が窓を背にして横に寝かせられていた。ベッドが壁にぴったりと付けられていて、高さもそんなにない。気をつけないと、起きてしまいそうだ。

「どうしようか」

あまりこうしてもいられない。裸足の足の指を塔の外側のレンガの溝にかけるようにしてわずかな力を得、顔の中に入れる。胴の半分を入れたあたりで左腕を内側に入れて一先ず落ちないようにする。

内部を見渡した感じでは、壁際以外には物は置いていないようだ。
この窓も小さいからなあ：俺が窓枠に足をかけて丸まって乗るのが精一杯だった。

「お疲れ様。大丈夫？」

2

まだ陽が落ちることのない夜、ユウはどこか落ち着かない様子で居た。それを見たりチャードが訊く。

「どうしたの？ ユウ」

「いえ、あの：コウさん、本当にどちらかに行かれた様なのですから：」

「心配？」

「少し：」

誤魔化すように小さく答えた彼女に少しむっとした少年だったが、それを表さないだけの技術を既に会得していた。

「そっか。まあ、いいんじゃないかな？ 彼もそう言っていたことだし」

少し首をかしげて、テーブルの上にあるリチャードの宿題を集めてまとめた。

そしてユウは決意をしたような表情で頷く。

「私、少し探してきますので：先にお休みになってください」

そういうと、発言に驚いたりチャードは身体を起こしユウに近付いて：腕を掴んだ。

「駄目だよ。1人で出歩くななんて：危ないじゃないか」

「い、いえ、大丈夫ですから、お休みになってください：！」

「この間、大丈夫じゃなかっただろ？」

「本当に、大丈夫ですから！！」

リチャードは多忙である。小さいながらも、生まれ持った身分に負けないようにと努力を続けていたら1日のほとんどは予定で埋まっていた。

「彼を理由にして、また探すの？」

半分正解、半分不正解の答えを口にして苦笑をこぼす。彼が無邪気な笑いをすることはとても珍しいことになっていた。

「いえ。そのようなことはありません」

ユウは珍しく迷いのない瞳を向け、まっすぐに澄んだ瞳を見つめる。

「ああもう」

リチャードが目をそらして頭をかいた後、ふっとため息を吐いてもう一度ユウに視線をあわせた。それはどこか、子どもを大人しくさせるような仕草である。

「分かったよ、僕も行く。それでいいだろ？」

「で、ですから、早くお休みに――」

「これは命令。この部屋の外に行くなら、僕も行く」

そう言われてしまうと、ユウは何も言えなくなってしまう。

「分かりました。行きましょう？」

「僕の前を歩くこと、許してあげるよ」

「ありがとうございます」

部屋を出て、下の階へと降りる。そこには屋敷で働く人々の寝所があつて、生活をするスペースになっていた。ユウの迷いのない足取りに、やはりこちらの方が先決なんだなぁと納得する少年である。

「この前はどこまで調べたの？」

「地下へ向かう階段があることを発見し…帰ろうと思って歩いていたら、見つかってしまいました…」

少年が日頃から、最後の最後で詰めが甘いと言っていることが現実になったらしい。

「ユウらしいね」

笑いを含んだ声。ユウは俯き、リチャードとは反対の方向を見る。
「また、そんなことを仰らないで下さいよ…」

怒りというよりは、恥ずかしさから尻すぼみのセリフ。

「まあまあ。それで、中は見なかったの？」

とりなすようにいった言葉に、かろうじて聞き取れるくらいの言葉を発した。

「はい、時間も時間でしたから…」

「そっか、じゃあ、今度はその中から探そうか」

「はい」

小さめの声で頷いて、目的地を目指す。

リチャードはちよつとした冒険のような気持ちで廊下を歩いた。

ユウはもう少し、真剣な眼差しだったけれども。

たどり着いた先は、廊下の一番奥にある木の扉だった。さび付いた鉄の丸い取っ手、それを握ると手に赤黒いものがつく。

「ユウ、この前はどこまで来たの？」

「はい。この扉が開いていて、階段があることを確認しただけでした」

辺りを見回し、扉を開いて中に入る。階段は蠟燭の明かりだけで照らされ、湿った空気が存在していた。さすがに二人とも無言で歩いていたが、先に歩いていたユウは気がついた。だんだんと、嫌なものに近付いているような、すえた臭いが漂っている。

足音を消しながら階段を降りていくと、最下で扉に行き着いた。

いつの間にか恐怖で身体が震えていたが、ゆっくりとその扉を開く――

第十三層 目撃・密会

0

そうして彼は知るのだ。

誰よりも先に知らなければならなかったものを。
得られなかったそれに羨望を抱きながら、

彼はそれを護りたいと思うのだ。

1

「…はい？」

ぴったりと窓にはまる格好になっている俺のことを、してやった
りといった瞳が見上げていた。いつの間にか、ベッドに仰向けにな
っていた女性は、その瞳を俺に集中させている。

「あ、いや、おれは、その、怪しいもんじゃ…」

「窓から侵入しておいて、怪しい者ではないと言うのね？」

おっとりした喋り方の女性は、くすりと笑った。

「あゝ：怪しいですけど…その、危害を加えようとか、そういうつ
もりは全く無くて、これはその…」

落ち着いた雰囲気を持つ女性は、その透き通るような髪を右の肩
の辺りで緩く束ね、残りの先を前に垂らしながらベッドを降りる。
そして壁際に置かれた古い椅子に腰掛けながら手招きをした。

「ええ。分かっていますよ、悪意がないことくらい。あなたからは、
そのような雰囲気は微塵も感じられませんもの。どうぞ、中へ：大
きな小鳥さん」

俺は何故か子どもがいたずらを優しく咎められたような気分になり、慌ててベッドを飛び越え、部屋の中央に降り立った。

「あら、小猿さんだったのかしら？」

くすくすと笑う女性は、見かけよりも年月を経ているような雰囲気がある。

「どうか、なんだこの貴族のようなセリフは。ここは他の国か？」

「あなたのお名前は？」

「ぼ、ぼくは……」

「いやいやいや、俺。なに『ぼく』とか言ってるんだ？　気色悪いぜ、おい。」

「お：俺は！　：コウです」

フェリスと名乗っていいものなのかを考え、先ほど盗み聞いた話から名乗らないほうがいいと告げなかった。そのことについては何も聞くこともなく、彼女はそう、と相槌を打った。

「あんた：いや、貴女は？」

「いいのよ、無理をしなくても。使い慣れていない言葉はやめたほうがいいわ。心を乱すから」

不思議な女性だった。不思議な雰囲気を持つ女性だった。何もかもを見透かしたような物腰で、だけれど全てを受け入れているような……

「私はランというのよ、コウくん。よろしくね」

ランと名乗った女性は右手を差し出してきた。

「ここでは握手は無礼になるんじゃないのか？」

「……？　ああ：男性の側から女性に手を差し出すことは、少し戸惑われるわね」

俺は何故だろうと考えながら左手を差し出す。：当然、握手は出来ない。

「ごめんなさい、右手は駄目なんだ」

自然とそんな言葉がついて出た。ランさんは気を悪くするどころかにつこり笑って、左手を差し出して握手をした。

「包帯をしているとはいえ、最近サボりがちだからな…。」

ランさんは俺に床に座るように促した。敷物が無いことを詫びる言葉を添えて。

「なんでこんなところにいるんだ？」

時間もないことだし、少し悪いけれど…訊くことにしよう。

「それを知らないなら、なぜここに來たの？」

質問が質問で返された。確かにそうだ。一応不法侵入だし、それなりの理由は必要になるだろう。

「えっと…保護者役において歸られたからここに泊まることになって…環境が変わるとあんまり眠れなくて、城を彷徨っていたらこんなところに出て…ここを見つけたんだけど、扉からは入れそうに無かったから、窓から入ってみた」

自分で言うのもなんだが、嘘だとすぐにバレるな。

すべてウソというわけじゃないけれど。

「そう」

…信じてます？　もしかして。

「それで、本当は？」

あ、やっぱり無理だったか。

どうしたものかと考えていると、ランさんは俺を…正確には、俺の胸元を見ていた。その視線をたどると、その先は赤く輝いている。

「あ…いや、これは、その…」

「それ…誰のものなの？」

「え？」

ランさんの瞳は先ほどまでとは違い、真剣そのものだ。どうしようにも、他に答えは持ち合わせていない。

「俺のものだ。第三階層街…この下の階層街騎士ギルドに居たホールランドってやつから貰った」

「名前は？　その人の」

彼女は何故か必死になっている。それは追い詰められた動物のよう、ともすれば反撃に出そうな勢いもある。

「…リ…リ…」

「リカリア、ね？」

「そ、そうそう。そんな名前」

「貴方の名前は？」

…さて、どうしようか。

俺はどうしようか本気で迷った挙句、口を開いた。

「…コウ・フェリス」

2

夜が明けてリチャードの部屋に戻ると、ドアをノックする。

「俺だ、コウ」

小さい声で囁くように言うと、慌てたような物音の後にドアが少し開いた。どう考えても、入ることの出来るような隙間ではない。中から覗いた瞳がユウのもので、怯えたような色が窺える。

「あ、は…はい、少しお待ちください」

がたんと音がして、ドアは開かれたものの…最小限だ。

俺がするりと中に入ると、すぐにドアは閉められ、椅子が幾つか置かれた。そんなこととしても、進入できるだろうに。

少年はそふぁに座っていた。二人とも顔が青い。

「…どうした？　なんかあったのか？」

問いかけても、帰ってくるのは沈黙だけだった。

「まあ、いいか。なあ、ユウ。少し話があるんだけど」

「何の話だ？」

暴君の息子は、険しい表情で俺を睨みつけていた。それには、さすがのユウも驚いている。

「何って、お前には関係ないことだ」

「主に関係ない話？ そんなものはない。僕にも聞かせられないなら、話しかけるな」

昨日とはまるで別人のように冷たい。何があったんだ、こいつら？

「俺はいいけど、ユウが困ると思うぜ」

「私、ですか？」

ドアの近くに立っている俺とユウ、部屋の中央にあるそふあに座っているリチャード。少年に聞こえないくらいの小さな声で、ユウに囁く。

「…っ…」

声に出さずに驚いた少女は、俺を見上げる。その様子を見ていたリチャードが立ち上がるが、先に行動したのはユウだった。

主に向けて、頭を下げる。

「すみません、リチャード様。その話を二人ですること、お許しください」

「ユウ！」

「大切なことなのです。私の存在をかけてもいいくらいに」

ユウはいつもの柔らかい雰囲気ではなく、真剣な眼差しをリチャードに向けた。どこことなく、誰かに似ている。

その意味は理解できない様子だったが、しかめた顔をそのままに首を立てに振った。

「五分だ。それ以上は認めない」

「ありがとうございます」

そしてふわりと微笑む。その存在だけで癒しを作る、とはこういうことを言うのか？

「まさか、貴方が：気付きませんでした」

「俺自身も、思い出せないでいるんだけどな」

周りが勝手に盛り上がっているだけで。俺は、なにもしらない。

「リカリア様からは何か指示がありますか？」

「七人の『仲間』を見つけろ、目印はこのコインだ、くらいか」

「…あの人は…」

呆れたように笑うと、首にかけていた紐を引っ張る。その先に、小さな辺だけの立方体が付いていた。

「これを見て、何か思い出せませんか？」

その中心にある透明な緑の揺らめき、そしてその奥にあるユウの瞳と髪が黄緑色に染まる。

―目の前にあるのは、見たことの無い見慣れた部屋。

―目の前に居るのは、横たわる紅の髪の女性。

―目の前に居るのは、女性に縋って泣くもう一人の女性。

『ねえさま…姉さま！』

―何故だ。思い出せ。

『私が、私が…っ』

―こんなこと誰も望まなかったはずでは？

―争いはまた繰り返すだろう。

―ああ…また、歴史の犠牲が出た。

「いっ…」

突然の頭痛に、頭を抱えて座り込む。
なんだったんだ、今のは…？

「主…ただ1人のあるじ」

ユウはそんなことを言いながら、俺に視線を合わせる。

「リカリア様にお伝えください。流龍はいつでもお力になると」
次の瞬間、その瞳から黄緑の色が抜けると目の前で力が抜けたように倒れこむ。

俺は急いで抱きとめようとしたが、つま先だけで体重を支えていたために対応しきれず：

「おい、もう五分…って、何してるんだ!？」

丁度ユウが俺に覆いかぶさるように気絶しているために、何の言い訳も立たない。というか、トラブルばかり俺に持ち込むな!!

「お前もうユウに近付くことは禁止だ!!!!」

第十四層 料理人

0

初めて知ったそれを隠し、
彼は新たな世界を知る。
進むには、
早すぎる。

1

陽が完全に昇った昼近く、俺はリチャードの部屋のそふあに横になっていた。

あれからリチャードは俺を警戒するようにユウとの間に入り、俺をにらみつけるという行動に出ていた。迷惑極まりない。話だって、まだ途中なのに。

「あ、あの：リチャード様、お勉強をなされるのでは：？」

ユウに聞いた話だと、ここで働く人々は城主に許されたもののみが外出できるのだという。買い物に行くことも、許可が下りた人たちで分担しているらしい。だから、ユウはリチャードがどの時間以外に行くのかを正確には分らない。

つまり、外に出る用事があったとして、それをすっぱかしていようがいまいが分らないというわけだ。

「今日はないんだ、大丈夫」

ユウにはにっこりと笑みを浮かべ、俺を睨む。

：いや、そんな顔されても。

「それにしても、遅いですね：：ジル様。迎えにいらっしゃってもい

い頃合なのですが…」

「さあな、あいつの行動はよく分からない」
下手をすれば置いてけぼりということもありうる。

「…早く迎えに来てやればいいのになー」
感情を全く込めないリチャードのセリフに、ユウはただ困った顔をする。

「あ、あの、私…皆さんに何かすることがないかを聞いてまいります」

状況を見かねて立ち上がったユウは、そのまま廊下に出ようとして立ち止まる。

「……………」

「ど、どうしたんだ？」

黙って固まっているユウに声を掛けると、振り返って困ったようにリチャードを見ている。

そういえば、この部屋籠城状態なんだっけ。

扉の前には椅子や小さいテーブルが置いてあって、外から簡単に開くとは思うけれど一応閉じこもっている状態ではある。

「あ、あの…コウさん、ついてきてもらえますか？」

「なっ！　僕も行く！」

すかさずリチャードが立ち上がる。

「いえ、リチャード様はこちらに残ってください。あの…リチャード様が参られますと、皆さんが仕事になりませんから…」

遠慮がちの発言とはいえ、結構ショック受けてるぞ、あの小僧。

「う…わ、わかった。…おい」

腕をつかまれ、少し低めの顔を見る。

「なんだよ？」

「ユウに変なことすんなよ」

「するか馬鹿」

小声でそんなやり取りをしユウの頼みで、ここに来てから部屋に置きっぱなしにしていた剣を下げて部屋を出た。

一階の奥では、働く人々が忙しそうにしていた。多分、昼の準備やら掃除やらをしているのだろうけれど…やっぱり、にぎやかなんだな…

「あれ？ ユウちゃんじゃないか？」

少し太い女性の声。振り向くと、少しふっくらとしたオバさんがいた。この城の制服らしい紺のエプロンドレスではなく、汚れた白の厨房の服を着ておたまを持っている。

なぜおたま。

「あ、おばさん」

「どうしたんだい？ 最近顔を見ないと思っていたら…バカっぽい坊主を引き連れて」

「あ、あ…おばさん、この人は…」

「なんだよオバサン」

「え、ちょっと、コウさん!？」

「ははあ、さては城主様に無礼を働いて捕まったんだろ？ 第二階^{二の}層^{へん}街じゃ見かけない顔だ」

「無礼を働くだ？ あいつの存在のほうがよくぽど無礼だろうが」

「コウさん!!」

オバサンは陰悪な表情で俺に近づいてくる。そして大して変わらない身長の子に俺を見下ろして不適に笑った。

「その意見には賛成だ。あんたの名前は？」

「コウ」

「ふん、どうせいいもん食ってないんだろ？ 飯食って行きな」

ユウがおばさんと呼んだオバサンは城の調理役なのだそう。俺とユウは比較的広い部屋で一緒に昼飯を貰った。部屋は木の机が並んでいて、大勢で食べるための部屋なのだろうと思う。

「今日は人が少ないですよ」

皿を空にしたユウは、ふうと一息吐いてからそう言った。

「今日は買出しの日なのです。城から出ることを許された人がみんな

なの分をまとめて買いに行くので、時間がかかるのです」

「その分、食費は浮くけどね」

オバサンがいつの間にか背後に立っていた。

…気配を消すな。

「どうだった？」

「まあ、不味くはなかったな」

「コウさん！」

オバサンは豪快に笑って、俺の髪をぐしゃぐしゃにした。

「坊主、一宿一飯の恩っての知ってるかい？」

「……………」

した側から出る言葉じゃないだろうに。

「さてと、そういえば二人とも、何をしに降りてきたんだい？」

そうだった。ユウには目的があつてここに来たはずだ。

「ええ、何か仕事はないかと思ひまして。何もせずに居るよりは、落ち着きます」

「そうだねえ…」

オバサンは少し考えた後、ユウの頭を撫でながら何もないと言つた。

「そうですか…それでは、戻りますね」

ユウはそういうと、お辞儀をした後に歩き出した。俺はその後をついていく。

2

城のエントランスにある階段を登っている途中で、呼び止められた。

「ユウ！ どこにいた…ジル・フェリスが来たぞ」

振り向いたユウは、俺と顔を見合わせる。そして急いでリチャードに声をかけ、応接室へと向かった。

覚悟を決めて入ると、城主とジルが険悪な雰囲気の中無言で居た。

ジルはそふあに座り、城主は近付くことなく立っている。

「お前のところの無能な息子が来たぞ」

「少なくともお前よりは有能だ」

…近付きたくねえ…

「ほら、帰るぞコウ。この町に少し滞在して、研究所^{ラボ}からの書類を待つ。それをこいつに叩きつけてから上階層^{うえ}街へ行こう」

「お、おう」

俺はユウを振り返りながら、ジルに引きずられるようにして歩いた。扉が閉められ、たった半日で見慣れた真っ白な廊下を進む。そして大きな門を過ぎ、止まっていた車に乗って走り出す。

「コウ、何もされなかったか？」

「お前が置いていったんだろ。されるも何も、あいつに近付いてないから」

今夜にでも、リカリアに連絡をしてみるか。

第二階層街騎士ギルドは、見るからに金がかかっていそうな佇まいだった。というか、あの真っ白い城程ではないにしろ、ただのギルドが持つには不相応なくらい豪華な建物。

まず、高い。聞いたところによると3階建てのようだ。あの城は4階建てで、それよりも低い建物の中で一番高い、らしい。そして、装飾が細かい。所々に描かれている古代の様子は、言い伝えを基にしたものだろう。4匹の龍、その上に2匹の大きな龍が描かれる。二匹の龍がにらみ合うその中央にはただの円が描かれ、二つの龍を止めようとしているようにも見える。

天井はそれほど高くない。その分を上階に回しているのだろうけれど、どうして高い建物を作ろうとするのかがわからない俺にとっては、もったいないと思うくらいだ。

上に高いだけかと思いきや、地下2階まであるらしい。よく分からない。

ジルは騎士ギルド受付で身分証明をすると、奥へと通された。も

ちろん、俺も一緒だ。騎士ギルドの建物は仕事をするための部署が分かれた本館と、中庭を隔てて騎士たちのための兵舎があるらしい。俺たちは始めに本館1階の応接間へ通され、軽く雑談をしたあと待たされ、夕方ごろに兵舎へと案内された。

その頃にはジルの機嫌も直っていて、安心した。

「コウ」

兵舎で夕飯を食った後、あてがわれた部屋でボーっとしているとジルに呼ばれた。面倒だから首だけ動かしてジルを見ると、ベッドに腰掛けたジルはにやりと微笑んだ。

…気味悪い。

「どうせ、少しの間ここにお世話になるんだ。騎士たちに稽古をつけてもらったらどうだ？」

「稽古？」

「剣だ、剣。以前使っていた武器は全部預かっているから、いざというときに剣に慣れていないと不便だろう？」

「…めんどくせー…」

剣は、まあいいとして。稽古だ。俺は昔から稽古だの練習だのが嫌いだった。仕方なく受けていたけれど…

「駄目だ。これからは、きちんとした力をつけるべきだ。君は、自分のことを知らなさ過ぎる。いつか、力が必要になるだろう」

「…じゃあジルは知ってるのかよ？」

「…さあ、僕が知るはずないだろう？ 君の事は、君自信で知らなければ」

早起きって苦手なんだよなあ…

第十四層 料理人（後書き）

長らくお待たせしました：

新学期に入り忙しく、

作者多忙のため再び不定期になりますが、
なるべく早くお届けできるようにしますので：

どうかよろしく願いますっ（＜|＞）っっ

感想・コメントお待ちしております。

第十五層 師範

0

動かないものを的にするのは簡単なのだ。
動くものこそ難しい。
それを動かなくするのが目的ならば。

1

俺は人目に付かない場所を探した。しかし、さすがに騎士ギルド、国のお抱え軍隊。不法侵入に備えて…なのかはともかく、夜の警備も怠っていない。人目につかず、且つ会話を聞かれない場所。そんな条件で探し回った結果、結局屋根の上に落ち着いた。

「さて。え…と、名前なんだっけ」

首からぶら下げていたものを引っ張り出す。側面は赤く光っていない。

「り…り…りい…」

り、しか思い浮かばない。

『呼んだ？』

「うわっ!!」

いつもいつも、唐突に話しかけてきやがって…。

『いい加減覚えてよね、ボクはリカリア。リカリア…ホーランド。はい、復唱する!』

「り、リカリア、ホーランド？」

『良く出来ました』

子どもと接するときのような優しい声。

…俺はもうガキじゃねえ。

『んで、なに？』

精一杯怒りを抑える。ため息を一つ、それから口を開いた。

「お前、調べ物得意か？」

『お前って…リカリアか、りったんって呼んで？』

…どこの誰だ、それは。

「じゃあな」

『や、ボクは別にいいけど』

そうだった。俺が頼もうとしていたんだった。

「…リカリア。調べ物を頼みたい」

『…りったん…』

「それは断固として拒否する」

『ちえっ』

というか話が進まねえ。

「第二階層街を実質支配しているパヴェロ家について。主に、現城主のこと」

少しの間があり、次に発せられた声はいつもとは違っていた。

『…第二階層街のパヴェロ？　どんなことに巻き込まれているのかは知らないけれど、関わらない方がいいと思うよ？』

「そこに、お前の言う『緑』が居るんだよ。それに、城主の…そのせいで第一階層街に行けないんだ」

『ふうん…ボクとしては、緑と会ったならそれ以上はしなくてもいいと思う、って言うかしないほうがいいとは思うけど。まあ、こーちゃんが言うなら、仕方ないね』

「ちょっと待て。なんだこーちゃんって」

初めて聞いたぞ、そんな呼び名。

しかしそのことには触れず、一日待ってと言って通信は途絶えた。

声が止んで急に静かになった夜、かすかな物音が聞こえた。それも、中庭の方から。

屋根から覗くと、騎士の一人が剣を振っていた。それも、ひたす

ら振りかぶって振り下ろしている。そんな方法で上手くなれるとは思っていないが、それでも無駄な努力だな、と思うくらいには下手だ。剣に振り回されているようにも思えるが、単に疲れが出ているだけかもしれない。

「：あれじゃあ、前線で死ぬのがオチだな」

最下層街で過ごしてきたからわかる。あんな軟弱なやつ、人どころか獣だって殺せないし、逆に殺されてしまう。疲れが出ているにしたって、ふらふらだからこそ一撃一撃の重みが増す。

単に、殺気が感じられないからこんなことを思うのかもしれない。さて、と：ジルのところに戻るか」

俺はさして気にも留めず、屋根から下りる。するりと部屋に戻ると、丁度ドアがノックされたところだった。今日は珍しく個別の部屋をあてがわれたから、もしかしたらジルかもしれない。

「誰だ？」

「コウ、いるかい？」

：いなかったら返事があるはずがないだろう。

「居るけど。なんだよ？」

「開けてくれ」

何で俺が：

ドアノブをまわして引く。すると、両手に大きな荷物を抱えたジルがにこやかに立っている。正直、変。

「な、なんか用か？」

「君にプレゼントだ。必要なものだから、持っておけ」

ゆっくりと部屋に入って、荷物をベッドの横に置いた。そして、部屋を去っていった。

荷物は、箱に詰め込まれているらしい。箱が微妙に変形し、ヒモで締め付けているから形が保っているようなものだ。

開くか、開かざるか。

：迷うなあ：

次の日の朝、ドアがノックされた音で目を覚ました。

強く叩かれたドアが、そろそろ壊れそうで、慌ててドアを開く。

「遅い！ 稽古の時間は始まっている！！」

目の前には薄い金の髪と藍色の瞳を持った騎士が立っていた。

「…は？ だれ？」

それを聞くと、瞳を怒らせて睨んできた。

「第二階層街騎士ギルド支部長から稽古指導を賜っている、師範代のウィルソン・パンデ。ジル・フェリス様よりの依頼で、お前の稽古を担当することになった。わかっただろう？ これから稽古だ！！」

「聞いてないし」

だいたい、俺は受けた覚えすらない。

「しかも、面倒。俺別に騎士になる気ないし」

「…見習いの服を着ておいて何を言っているんだ？ それに…」
部屋奥を覗かれた。そこには、変形し開封済みの箱が放置されている。回りには同じく放置された訓練用と思われる防具やがある。

…はめやがったな、あの男…

「やる気はあるのだろうか？ はじめだから仕方ない、許すから準備…防具と訓練用の剣を持って付いて来い」

ウィルソン師範代はそういうと俺を待っているようだ。…くそ、あの狸野郎…

「ほら、準備したら行くぞ」

覚えてやがれ！！

* * *

稽古場に連れて行かれると、俺よりも大人のやつらが剣を使って打ち合っていた。

…あゝあゝ、残念なやつら。型にはまったやり方じゃ、戦場では生きられない。

「コウ君、こっちだ」

入り口でボーっとしていると、声をかけられた。そこにはウィルソンではなく、背の高い人物が手招きしていた。黒っぽい髪を頭の上の方でまとめ、瞳は緑。すらっとした体系、稽古用の防具は使い古されたように見える。左の腰に下げた剣の柄には布がまいてあった。

「えっと、あんた誰…ツってえ!!」

瞬間、ウィルソンに後頭部を強打された。

「フェリス、敬語を使い。この方は第二階層街騎士ギルド支部長であり、この稽古場の師範でもあられる、サキ・カスガ様だ」

…和名…ってことは、出身は別の国か。

「よろしく。喜ばしいことに多忙なのでね…あまりここには顔を出せないのだけれど、顔を見ることが出来て嬉しいよ」

「…ども。コウ・フェリス。あんたが…ッ!」

「あなた」

「あ、貴女がここの師範代…です、か。えっと、ん…」
「どうやって敬語にしたものか。」

「ふふ、いいだろう。普通に喋った方が、スムーズに会話が出来るようだ」

「カスガ様!」

「いい。私が許可する。さて、コウ君」

「あ?」

ウィルソンに殴られる前にしゃがむ。これでウィルソンの攻撃は防げる。

「ふむ、なかなかの反射神経だね」

「鍛えられてるからっ、と」

追撃を前転しながら避けると、カスガ師範を盾に隠れた。

「ぐ、卑怯な…」

「へっ、戦いに卑怯も正々堂々もあるか」

「ここへ直れ！ その曲がった根性直してやる！！」

「まあ待て」

ここでカスガ師範がとりなしたのは、結局凶と出ることになる。

「コウ君」

にっこりと微笑んだその笑みには…

「私と手合わせをしよう」

「カスガ様！？」

「はぁ！？」

…悪魔が潜んでいた。

小休止 生まれた日

0

きみはだれ？
ぼくはだれ？

だれもいない、いない。

1

眠い目を擦り起き上がったのは、小さな少女だった。年は10くらい、瞳は半分ほど閉じられたままだった。うつすらと差し込む陽を見つめながら眩しそうに目を細めると、伸びをする。簡素なベッドから降り、ベッドを整えると、部屋の外の洗面所へ歩いていく。洗面所では水道の蛇口が五つずつ並び、その上には広い長方形の鏡が置いてある。きちんと掃除されているからか、鏡はぴかぴかに輝いていた。

「ユウ、おはようさん」

「ふぁ？」

声をかけられ、顔を洗っていた少女が振り向くと、白いエプロンを身につけコック帽を小脇に抱えた恰幅のいい女性がいた。瞳は細められ、親しみやすい表情で少女の頭を撫でた。

「今日は早いね？どうしたんだい？」

「あ、はい、えっと…」

なぜかユウが言いよどむと、もう一度頭を撫でる女性。

「いいよ、早起きする理由があったんだろう？」

「あ、はい」

「そうかい。それはよかった。じゃあ私はこれで」

どうやら女性は、珍しく早起きした少女を見つけて声をかけるために近付いてきたようだった。少女はぺこりとお辞儀をして女性を見送ると、自らも部屋に戻る。

そして、ワクワクした顔で着替えるのだ。

――今日は少女が主に救われた、記念すべき日なのだから。

――

降りしきる雨の中、壊された木造の豪邸の前。玄関だった場所に、1人の女性と幼い子どもがいた。女性は母親であろうが、今は力なく倒れている。その腕に抱かれ、幼い子どもも赤ん坊が泣いていた。母親の頬の辺りに手をやり、力ない手で触るも女性は動かない。弱い泣き声は、辺りに響く。

「うるせえ…これだからガキは・・・」

「落ち着け兄貴。この母子は殺さず連れ帰れってご命令だ、早くしねえとまずいぜ」

2人に影が差し、赤ん坊は抱き上げられ、母親は担ぎ上げられる。「このダラック兄弟が弱小貴族の使い走りたあ、泣けてくるね、俺は」

「兄貴、金のためだろ。この仕事が終わったら地面に戻ろうぜ。無銘の盗賊に恩を返しに行くんだ」

「まあなあ・・・ち、あんにやろう、面倒くせえことさせやがって」
男2人は暗い影に帰っていく。車に乗り込み静かにスタートさせるとその場を去っていった。その後姿を、焼け焦げ崩れ落ちた豪邸が見送っていた。

＊ ＊ ＊

「貴様！なぜ言われたとおりにできんだ！！」
数年後、豪邸の跡地には城が建っていた。焼け焦げて炭になった柱は見る影もなく、あるのは白い壁と赤い絨毯の敷かれた真新しい城。

きれいな廊下や部屋の並んだ1階より下。地下に入ると、むき出しの塗装の床や壁が並ぶ。木製の薄汚れた扉、その奥は一部屋ごとに座敷牢があった。牢の中は冷たい部屋で、拘束するための鎖のみがある。窓もなく、よどんだ空気の中に幾人かが入れられていた。その中であってただ1人、少女が城の主にも怒鳴りつけられていた。床に転がされ、暴行を受けている。

「いいか。お前は親に捨てられたところを私が拾ってやったのだ。私に奉公する義務がある」

ごろりと転がされた身体には既に力が入っていない。しかし、その瞳からは涙を見ることは出来ない。青あざの出来た腕や足は力なく投げ出され、虚ろな瞳は主の足を見ていた。

主は少女に飽きたのか、くると背を向けて歩き出す。響いていた足音が次第に遠のいていき、少女は初めて動こうと身体を動かした。結局、動けずに薄暗い天井を見上げた。

「……あ、」

試しに声を出してみると、声を忘れていたわけではなさそうだ。寒い、と思う。地下は太陽の季節でもひんやりとしている。

「大丈夫か」

暫くして、ぼそりとなんか声が聞こえた。それはどうやら男の人

で牢の中にいるらしい。しびれる身体を動かして起き上がろうとすると、「動かなくていい」という声が聞こえてきた。

「全く、あいつも酷いことしやがる…」

男の人の姿は見えないが、心配してくれているのだろう。

「…ん？ 誰か来る…」

それきり声が聞こえなくなり、今度は足音が聞こえてきた。少女に恐怖をもたらす足音ではなく、それは随分と危なっかしい足音だった。

「…っしょ、いっしょ」

今度は少し高い、子どもの声のようだった。ゆつくりとこちらに近付いてくる。

「ふふりん、ここならぜったいにみつからないぞ！」

何かをして遊んでいるらしい。少女にはどんな遊びだか、見当もつかなかった。

男の子にも女の子にも見える小さな子どもが、軽い足音を響かせて近付いてくる。子どもには見えないのだろうが、少女にはその姿がはっきりと見えていた。高価そうな服を着て、綺麗な髪と柔らかそうな顔。少女とは反対の姿である。

「わ…まっくらだ…」

一応薄暗い照明がついているのだが、地下の上で生活していたのだろう子どもには真っ暗に見えるらしい。

「なにがあるんだろう…」

少女はしびれる身体をゆつくりと起こす。直感だったが、その子どもに自分の姿を見せてはいけない気がしたからだ。ゆつくりと確実に近付いてくる足音に、少女はゆつくりと音を立てないように下がっていく。この先には、物陰がある。そこに行けば、隠れられる。立ち上がれずに座ったままゆつくりと下がっていた少女には、背後を確認する時間などなかった。それは致命的なことだった。

カラン、と、金属の音がして、少女は凍りつく。

「…だれかいるの？」

子どもの問いかける声に、少女は反応することが出来ない。右の手が触ったものは、赤黒く錆びた短剣だった。

「…おねえちゃん、だれ？」

声をかけられて初めて目の前に子どもが立ったことに気がついた。焦って振り向くと、無垢な瞳が少女を見つめていた。

「けがしてるよ？　だいじょうぶ？」

「…あ、は、い」

たどたどしくはあるが、声を出すことが出来た。少女はどのようにして逃げなければ、と思う。おそらく、もうすぐで――

――大きな音がした。

それは少女に恐怖を与える音で、重く荒々しい足音が聞こえてきた。それはいつもより急いでいるように聞こえる。

「リチャードっ！！」

子どもの肩がびくりと震える。

「ああ、どうしてこのような汚らわしいところに…心配したぞ、リチャード」

子どもを抱き上げる恐怖の対象は、優しい父親である。少女には得たことのない暖かさだ。

「貴様…リチャードをそそのかしたな！？」

これ以上暴行を受ければ、おそらく命に関わるだろう。けれど、少女はそれでもいいと思った。それで、この世界から逃れられるのであれば。

「とうさま、おねえちゃんは どうして けがしているの？」

小さな声が、主の行動をさえぎった。主は優しく、子どもに語り掛ける。

「これは人ではない。私やリチャードに仕える召使いだ。失敗を重ねたのでな、仕置きをしているところだ」

本来、少女は失敗などしていない。何故か、主は少女を目の仇にしているようだった。

「でも、ぼくにはいないよ？」

首をかしげる子どもは、主の腕の中から抜け出して少女にかけよる。

「そうだ、おねえちゃんがぼくのめしつかいになってよ！」

「いかなぞりチャード、お前にはもつと優秀な者をつけるのだから」「やだっ！！ このおねえちゃんがいい！」

「わがままを言うなりチャード！」

「だって：ここにはぼくといっしょにあそんでくれるがいらないんだもん！」

主はうむ、と考える。

「では、呼んでこよう。それならいいだろう？」

「やだー！ このおねえちゃんがいい！！ ぼくがさきにみつけたんだから、ぼくのものだ！」

主は大きなため息を吐いて、リチャードの頭を優しくなでる。

「わかったわかった、それはお前にやろう。ちゃんと躡けるのだぞ？」

「うん！ ありがとうさま！」

そのやりとりは少女にとって余りに軽いやり取りだった。けれど、無垢な瞳を見ていると、今よりはいいのかもしれない、と思う。

「おねえちゃん、なまえは？」

名前などない。名前など知らない。

しかし少女は、それを言葉に出すことをためらう。そんなことを言ってもいいのだろうか。

と、主となった子どもの後ろから、嫌なものを口に出すような声音が聞こえた。

「ユウだ」

「ゆう？」

子どもは首をかしげる。どうやら確認しているようだ。

「は、い」

初めて聞いた自分の名前。

本当かどうかなんてわからないが、ようやく物から人になれた気

がした。

「これからよろしくね、ユウ!!」

主の背後では、憎悪を映した瞳がユウを見ていた。あの暴力に晒されるのには慣れたが、これからはどうなのだろうか。

—わからない。

けれど、多分大丈夫だろう。

なんとなく、そんな気がした。

――

「ユウ、起きて」

ゆっくりと目を開けると、主の顔があった。びっくりして飛び起きると、頭を顎にぶつけてしまった。

「いたっ…」

「いってえ」

頭と顎を押さえながら、顔を見合わせる。2人とも涙浮かべ、ユウは申し訳なさそうに、リチャードは困ったように。

そのうち、くすくすと笑い出す。

「あ、リチャードさま、こちらへいらしてください」

「うん？ なに？」

促して、広い部屋の中にあるテーブルへ移動する。

何も乗っていないテーブルの定位置にリチャードを座らせ、自らは隣のキッチンへ。

そして戻ってきたユウは、その手に小さなケーキを持っていた。

「…どうしたの、それ？」

「今日がどのような日か、覚えておいでですか？」

「うん、ユウの誕生日だ」

生まれて初めて人になった、誕生日。

「はい。それと、リチャードさまに救っていただいた日でもありません」

にっこりと笑って、少し崩れたケーキを主の前におく。

「：もしかしてこれ、手作り？」

「はい：お口に会うかどうか：」

リチャードはそれを一口、何のためらいもなく口に運んだ。

「うん、おいしいよ！ はい、ユウにも」

リチャードは一口分をフォークですくうと、ユウの前に運んだ。

ためらうが、リチャードの変わらない無垢な瞳が、否定することを許さなかった。

ぱくりと一口貰う。甘いケーキの味が口の中に広がる。

「誕生日おめでとう。これからもよろしくね」

「もったいないお言葉です。私も：ありがとうございました。一生忘れません」

そしてもう一度笑いあう。

それはとても幸せな日々だ。

あの頃とは違う、人間の自分。

世界はとても暖かい。

*

*

*

ユウは僕を許してくれるだろうか。

今のこの世界が壊れないだろうか。

いっそ壊してしまおうかとも思うけれど、幸せそうなユウを見ていたらそんなことも出来ない。

僕らはずっと一緒に入られない。

そんな気がするんだ。

怪我をしていても汚れていても失わなかった気高さや高貴さ。

それはきつと、いつかユウを自由へと導いてくれるだろう。

本当はそんな事許したくはないけれど。

約束だから。

僕とあの方の約束だから。

『あいつ』がしたことの後始末は、僕がつける。

だからそのときまで。

せめてそのときまでは、一緒にいさせてくれ。

許さなくてもいい、知らなくてもいい。

せめて隣に。

大切な、大好きな、姉さん――

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0152b/>

層の世界

2010年10月25日02時33分発行